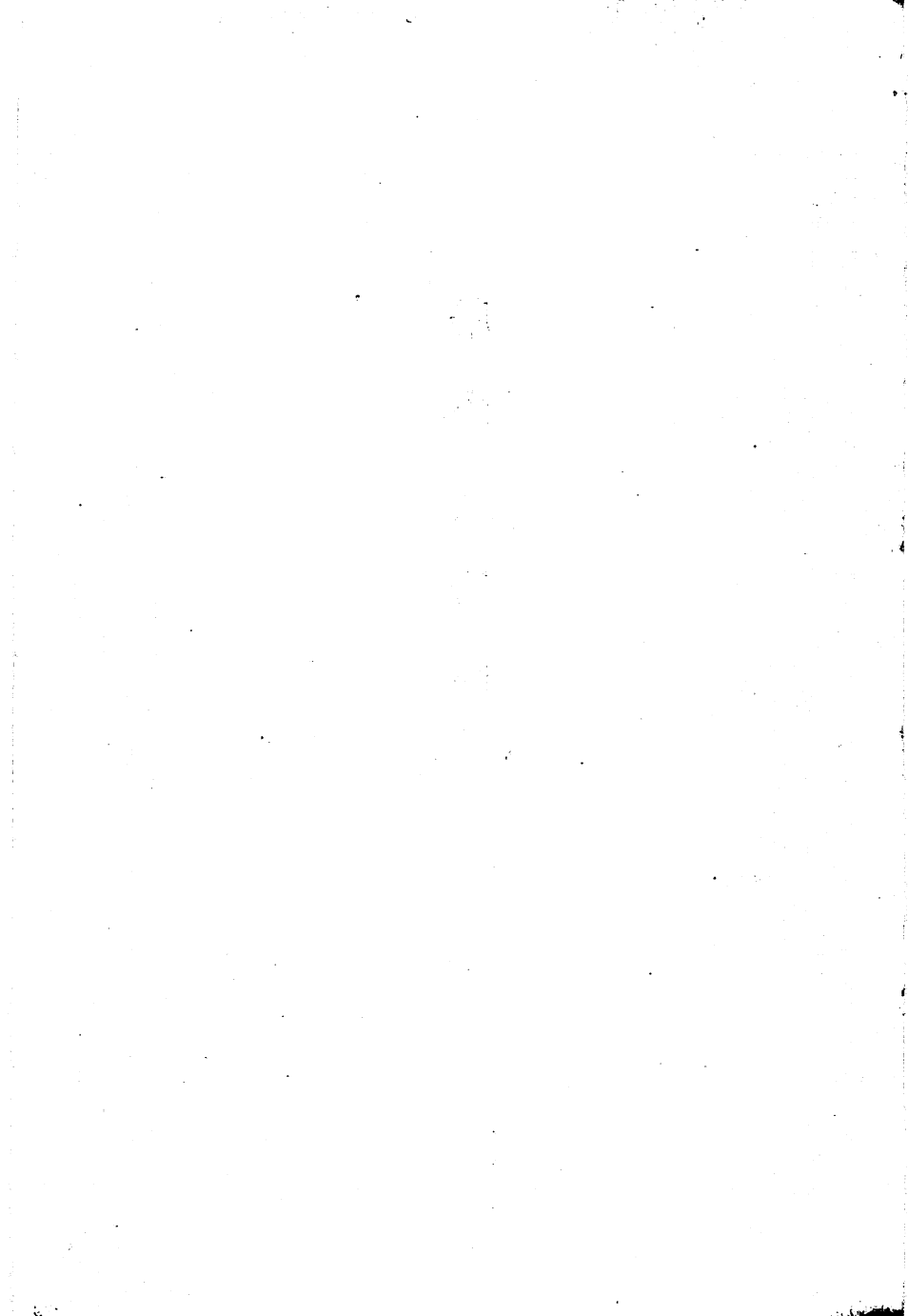


鷓鴣山姬捨松



鵜山姫捨松

作者 並 木 宗 輔

序詞放勳天下を帥に仁を以て民之に従ひ。桀紂天下を帥に暴を以て民之に従ふ。其好む所に令すれば。我秋津洲に法賢縁。思はず人の之に由る。道の道たる賢王のめぐみも深き四つの海。天津日繼の御調物。積り重て四十八代。稱徳天皇と申すこそ。ヲロシへ女帝ながらも。いやたかき。地御座の左に長屋の王子。佛法不思議の御評議とて。元興寺の積學。筑紫そだちの惡法師玄助僧正伴はるれば。かたへの席には右大臣豐成公。長谷寺の住僧德道上人をいざなひ給ひ。國母光明皇太后。三寶歸依の遺勅とて。兩僧共に椅子をゆるされ。フシ威儀とう。とうたる其中へ。地つがなく出くる田舎者。六十餘のやせ親仁。なんの遠慮もしらすの庭。御殿を見廻し御階のもとへ。立寄つてやり聲だし。詞身共は淡路のお百姓。武島の翁磯大夫と申す者。此頃うらが在所の海より。引上た御様。どうやらいなげななり格好。村中が寄合うて判斷しても知れぬ故。何かはなしに禁中様へ。お目にかけうと思ふから。秋のかたてにとつばかは。持つてきたれば待つてをれと。おつしやつてから三日になれど。よい物ちやおいていねとも。よしない物ちや持つていねとも。ぐつともすつともお返事なしに。つり付られていかい迷惑。はたごもたまらず年貢時。地どちらへどうなと埒明て。きり／＼往なして貰ひましょと。へつらひなしに百姓の。フシ詞遣ひぞ律義なる。地科むる色なく豐成公。詞ヲこりやく土民。今日則ち其御評議。地追付兎かうの勅下らん。瀧口にて暫くひかへよ。詞それ／＼官人此者其方へと。地詞の下に走り寄付きて。フシかたへに立去れば。地玉座の御簾かゝりて。天皇仰出さるゝは。詞今賤の男が詞のごとく。淡路の海より上りしとて。異形の佛を捧げしかども。我國は神國にて。佛法に程經ねば。靈佛

更に見別がたし。地七千餘卷の經々に。有名の佛か但し又。凶事のものか高僧達。立寄つて拜見あれと。かしこまり
 なる勅。豐成やがて黒漆の。御厨子の扉を開かるれば。くはつと沉香木の。かほりと共に光明かどやく菩薩の
 尊像。ハットおりたつ長谷の徳道。フシ信心肝に銘ずる禮拜。地合掌素直に座に着き給へど。玄昉はじろりつと。見
 向きし計り座も動かず。佛者をけづるけんどのの。詞鏡に仰々しく。詞ア、ラ忌はしやけがらはしや。是はこれ其
 昔。五天竺より到來せし。四韋駄と號す書に見えたる。神通の目連を。打殺せし竹杖外道か扱は又。四大海の水を耳
 る穴に封じて。三界衆生に憂目を見せし。拘留外道が形ぞならん。地玉座近くは穢有りと。ほくし掛ければ長屋の王子
 引取つてヲ適々。詞驚き入つたる博識多才。地いでく貴僧の詞に隨ひ。異形の物を王子が足下に。踏くだかんと
 立かゝるを。豐成押へてアツア暫く。詞それこそ一轍一途の御賢慮。玄昉の見立さる事ならんが。地兎角は兩評よ
 ろしかるべし。詞これく長谷寺徳道上人。和僧三拜せられしには思ひ當りも有るやらん。地訝しさよと尋ねに上
 人。忍辱柔和の袖撮合せ。事も愚や是こそは。詞補陀落淨土に影向まします。觀世音菩薩の尊像。御誓願は種々重
 罪。五逆消滅。自他平等即身成佛なさしめんと。地大慈大悲の御正體。其願文を誂とし。天下を惠ませ給ひなば。猶
 君が代は萬代と。治る國の御寶と。フシ奏せらるれば。地邪念の玄昉。むつと顔に聲さがなく。詞イヤア上側目利の
 當ずつほう違つた違つた。而像計りが菩薩と見えても。惣身は毒蟲百足の如し。外面似菩薩内心如夜叉。女を魔王の
 たとへを取つて。外道の尊む所の物なり。女帝の御前を憚りてよい加減に取なし置くに。治る國の御寶とは。帝を貶
 せん下巧か。地さあらば罪科輕からずと。横筋かいに理を付て。かさ押にやり込むれば。徳道笑止とア、いやはさや。
 然なの給ひそ玄昉殿。詞そも法華經の樞鍵。普門品の大旨を鑑るに。觀世音は一切衆生。有情非情を悉く。極樂
 淨土に導かんと。三十三身に像を分け。遍滿し給ふ一つの。尊像に疑ひなし。地和僧は何とて忌はしき。四韋駄と
 やらん書を誦じ外道の輩が尊める。非義の悟はしられしぞや。邪道を捨てて有がたき佛の御法をうけ給へと。理非明

白なる詞にぎつと。言句つまつてや、腹立ち。詞ヤア邪道とは推參至極。地あご引裂かんと口だんばく。肘はりかけても合掌し。構はぬ相手に詮なき力み。しまひ付ねばやれしばし。計ふ旨有り双方共。挑み争ふ事なかれと。鎮め給へる皇の。フシ御聲を機に控へゐる。地天皇豐成近うと召れ。詞驗者の兩説裏表。先づ觀音にて有るなしの勝劣を正さんには。其方娘の中將姫。普門品を讀誦して。夢中に菩薩の尊像を拜せしと兼て聞く。地是ぞ幸ひ召寄せて見分させよと勅判の。いとも畏きみことのり。承つて豐成公 オクリやがてへ使を立てらるゝ。地直なる道に負け色の玄助最眞な長屋の王子。苦々しげに笏取直し。詞よしは誠の觀音にもせよ。我神國には無益の佛俣。昔欽明の聖代にも。異國の法として捨られしが。尤なるかな佛道には。方便といひぬけて虚言つく事を專とす。地今其教を用ひ給ふ天皇にも綸言を。方便の偽とくろめん爲の下拵。近頃さもしき御所存と。嘲る詞を豐成聞きかね。詞コハ王子には粗忽の仰。綸言を方便の拵事とは。何を以てと言はせも立てず。イヤ拵事で有るまいか汝も兼を聞つらん。丸が一子春日丸を。帝位に即けんと望む度々。ともかくも〜と。地當座遁れにべん〜だら〜。延引成るは察する所。詞先年惠美の押勝と。心を合せ謀叛を起せし。驍虜の王が悴。淡路島へ置きし。大炊の君といふわつばを。呼返して御位を譲らんと思しめす。地お心あてと見すゑたる。王子が胸の割符を合す。佛法歸依の方便仕掛。詞但し春日に今日只今。御即位あれと天皇へ。勸るか豐成。地なんと〜と無理望み。今に始めず流石の大臣。返答困れば天皇も。あぐませ給ふ御氣色にて。詞イヤなう王子相構へて。地朕が心を疑ひあるな。一旦言ひし詞に違はず春日丸につゝがな。重て最上吉日選み位を譲らん今日は。先づ此の佛の評議あれと。宥め給へる折からに。中將姫參内と。披瀝につれて入り来る御階。傳ひもしなやかに。育ち氣高き振袖の。裯襦委手入らずは。本らし離が。花やよこはぎの。父のかたへに。フシ畏る。地帝も勸慮おだやかに。詞ヲ珍らしや中將姫。召しよする事余の儀にあらず。おことが兼々物語。瑞夢に菩薩を悉く拜見をせしと有る。其内の一體に。若此儼なかりしか。立寄つて見定めよと。地軟かなりし

勅諭に。お受も會釋中將姫。這寄摩寄り御厨子に向ひ。思はずはつと頭を傾け遙かに退り。詞ア、ラ有難や不思議やな。三十三夜さの夢毎に拜み申せし其中にも。わきて此尊像は夢の御告も速かに。地罪業深き女人を皆。數千の手にて救ひ取り成佛させん姿なり。よく見覺えて世の人に。語り傳へと一夜の夢に。ま見え給ふが十一度。詞我が姿は普陀落山。尋ね來ませとの給ひて。搔消す如く失せ給ふ。地大慈大悲の千手觀音菩薩の像にて在ます。猶も夜毎に拜したる三十三體繪像に寫し。肌身を離さず持ふと。懷中の守より取出して觀覽にと。玉座に向つて押開けば。實にも三十三身をしるせし中の千手觀音。此木像と一點一刀。違はず徳道見立の通りと。帝の觀感淺からず。豐成公は喜悅の眉。百官歸伏の思ひをなしはつと一度に手を合せ。拜せらるれば上人は。時の面目けら腹を。たてわかつたる王子と玄昉。佛頂面を赤らめて。フ返す詞もなかりけり。地天皇重て宣はく。詞實にも尊き靈佛なれども。天津日繼の御末なる禁庭には神慮の恐れ。地徳道見立の規模として長谷の本尊に立てられよ。しかし異形の體なれば玄昉の詞の如く。萬民必ず疑はん。詞姫が夢想に拜せし數。十一面の觀世音新たに作り此菩薩。御くしに納め流布有るべし。地再興有るうち尊像は中將姫に預くるなり。朕も世を治めてより未だ一事の慈悲をもなさず。佛法の大意を學び。餓たる民に金銀米錢。施して後春日丸を。日出度く帝位につくべきぞや。其旨心得退出あれと人氣を破らぬ勅。とりも直さず平等利益。御簾さがれば各々あつと。平伏歸服立腹も。柔き靡く。辭儀會釋立別。れてぞ。歸らるゝフシ跡へひよかゝ又出かける。淡路の翁磯大夫。邊を見廻し。詞はて扱こりや。皆何所へござつたやら。あんごらひよんと待たして置いて。又釣るのか。さうゝはおら等も迷惑。何のまゝ往んでくりよ。往ぬるぞや。往にますぞやと。地言捨て出るをこりやゝ待てよ。と御簾の内より呼びとめられ。詞ハアテ意地の悪い。隠れてさうなと振返れば。地御簾押上稱徳天皇。御階にすごゝ立ち出で給ふ。王位におされ磯大夫ハツト。フシ白洲にうづくまる。詞許す近うと間近く召れ。汝淡路の者ならば。三年以前に遠流せし朕が甥子の大炊の君。在家を知るやと宣へば。ア、成程其のお

方は。身共が在所の隣村よ。うろ／＼としてござります。ヲ無事なれば悦ばしい。随分命を全うし再び歸洛を祈れよと。傳へてくれ磯大夫。地其方は下賤の者なれども。物の哀れは知るべきぞや。力を添へて不便を加へいたはつてくれ頼むぞよと。勿體なくも龍眼に。涙を含み賤の男を頼ませ給ふは恩愛と。思ひやられて磯大夫。ほろりつと涙ぐみ。詞奴も／＼おいとしや。上々様でも思ひどは。同じ事か私めも。一人女子めがござります。かうして旅へ出て居る内も。子の事計り苦になつて。ほんにやれる空が。微塵もないから一倍と。身につまされておいとしばい。お氣遣ひ遊ばすな此方の村へひきとつて。結構に養ひましょと。地受がふ詞に天皇は。くれ／＼よきにと計りにて。御衣の袂を御顔に。フシあてさせ給ふ焦れ泣き。地磯大夫も娘が事。案じますればもうお暇。詞行くかよさらば。おさらばと。地見返りながら子に早う。あはじと急ぐ足元を義ましげに見送りて。夜の御殿に入り給へば。御格子參る女端内侍。しろく掲ぐる。搔燈明らけき。代の三重へためしなれ。地善と惡とは裏表淡路の國より差上げし。御佛の尊像に天皇御歸依まし／＼て。佛法に觀慮を傾け殺生を禁制し。飢たる者に八木を與へ。民の憂へを救はせ給ふフシ慈悲の御代こそ有がたき。地それを逆らふ長屋の王子次第に募る邪心。主を見ならふ難掌隨身。宿禰の鬼軍内舍人毎夜寢鳥をさしあるき未來は何とならの里。飛火の繁此處彼處フシ埒尋る宵月夜。地藏人はつと立やすらひ。詞やれ／＼探した。此松には雀が一匹とまつてをらぬ。貴殿は何て去られしか。サレバ／＼。此飛火の森は殺生禁斷の所故定て大分小鳥共が。とまつて居らんと思ひの外こそつく物は烏めばかり。地此儘で歸つては王子の御機嫌をこなふは必定。今一精出されよ。詞ういかにも随分探して見ん。地あれ／＼向ふの茂つた藪にはよい鳥共がをりそな物。如何様それよと見やるさきよりくる提燈。藤橋を付けたるは横萩の家の紋。詞エ、面倒な。かたくな者の右大臣豐成。きやつも佛法歸依の輩。我々が體を見は殺生ぢやの。なんの彼のとちんぶんかんで事喧まし。地地過さんと稻村のフシかげへ二人は身を忍ぶ。地程なく近付く豐成の提燈目當に兩執權左京之進晴時。久米の八郎景勝主人迎ひの一筋道。足

もとぶひの松蔭にて兩方行合ふ主従の。フシ禮儀正敷。兩人は土に手をつき頭を下げ。詞俄の參内心許なく。殊に夜中の御歩行。地御迎ひの爲參上と申上ぐれば豊成公。詞ホ、大儀々々。今宵俄の參内は大切な御内勅。それにつけ汝ら二人に申し渡す旨有りと。地下部を遠ざけ。松かげに人忍ぶとも知り給はず。立寄つて聲をひそめ。詞内勅有りしは余の儀でなし。長屋の王子兼て一子の春日丸に御位を繼がせ。其身は太上天皇にへ上らんとの無理望。又天皇は淡路の國に流されました。大炊の君に御即位ありたき觀慮にて。地戀ひこがれ給へども表向より呼歸さば。忽ち王子に謀叛おこらん。急に此事人知れず謀ひくれとの勅。詞畏て勅答し汝等二人を彼地へ下し。大炊の君を奪ひ返さんと。心せきて歸館の折から途中の合。地早速ながら打立ち。津の國より早舟に乗り淡路へ渡り。大炊の君を密に奪ひ取り立歸れ。彼の國は王子の領分たやすくは渡すまじ。何とぞ計略を以て首尾能くせよ。フシ大儀ながらと有りければ。地ハツとは言へど兩人が顔見合せ。ノウ八郎。詞君の仰はさる事なれども。變心我慢の惡王子。大炊の君に御即位の。催し有りともし聞ば如何成る事か出て來らん。ヲ、サ先づ我君への祟は治定。拙者は都に残りたい。イヤおれ残るはておれがと。地互に爭ふ主思ひ。豐成押へてヤレ兩人。詞萬一露顯に及びなば。先づ一旦春日丸に御位を譲らせまし。邪慾非道の長屋の王子を。當分なだめて置く内には。地遣唐使に異國へ渡りし舊臣達の歸朝を待受け。詞此人々としめし合せて其時こそ。大炊の君を天子と仰ぎ奉らんと。地宸襟もやすめ置きたるぞ都において氣遣ひなし。とかく天皇焦れ給ふ大炊の君を奪ひ歸る。役目こそ大事なれ。是より直にはや急げと。言ひ捨て其身は下部を引つれ。オクリ館へ歸り給ひける地仰に異議なく晴時八郎。いざ夜通しに津の國迄急ぐべしと立上れば。稻村の片陰より晴時八郎までくと。聲かけられて二人はびつくり。身構へして振り返り。詞我々が名を知つて呼びかくるは何やつぞと。地見廻せば兩方より拔身を提げ躍り出て。詞ヤアうつそり共。我々は王子の御家來。内舍人藏人宿禰の鬼軍。此稻村に居るとも知らず。主従寄合ひ密事の相談。聞た通りを早速王子へ御法進と思へども。汝等を淡路へやつた後

では。主君の御一子春日丸の御即位が後手に成る。それ故に呼びとめた。我々に見付られしは汝等が命の終り際。
 地寝鳥を刺すよりいと易く王子様へはよき土産。フシ覺悟ひろげとふんばつたり。地二人はふつと吹出し。詞ヤレヤ
 レ優しや密事を聞て。ようこそ往んでくれなんだ。此場で殺せば此方の勝手。通すな八郎合點と地一度に刀抜きはな
 し打つてかゝれば受とめて。ヤア推參なるあごた骨切さげてくれんずと。拂うてかゝる二人の相手。二人が達者の太
 刀さばき暫し支へて三重切結ぶ。地八郎も晴時も音に聞えし手利の若者。何かはもつて堪るべき眼藏人途に迷ふを。
 どさりと胴切鬼重も。フシ逃るが最期の後袈裟。詞八郎出來した。晴時出來た。刀と共に。フシ心もをさめ。地用意
 がよくば淡路へ立越え大炊の君をばひ返し。宸襟やすめん尤と勇む。水魚の道ひろき大江の。岸へと三重急ぎ行く。
 地青丹よし奈良の都の一構へ。時めく館は長屋の王子兼て愛子の春日丸。王位につけんと物工み。徒黨を集め取籠り
 叛逆逆逆のもてなしと。御達はしたも陰陽。フシつぶやささゝやき立集ふ。地女中頭の更科がコレ瀧野殿。詞おざさ
 殿。今宵も亦お客が有るげな。地お座敷廻り庭廻り。廊下の燈籠燭臺の用意もしておかんせや。詞サアさう聞いた故
 掃き掃除。お客と言ふは又例の。豊成公の後づれ岩根御前。若衆様を育てた權柄顔。一人は又意地悪の廣繼殿。
 地山猿のよな顔付で。女子見る目のいやらしさ。あんな男の女房に成る者もあるかいなう。詞ヤア男次手に更科殿。
 此頃から又宵藥賣。萬能屋の勘六殿は。こんなと深い中さうな。地アノ中門より内へとて男の通ひは法度と有る。
 詞固くろしい此館で。どうして逢はるゝ事ぞいなう。サア其あはれぬ所をば。切なう逢ふのがほんの楽しみ。人目忍ぶ
 が魂膽秘密。必ず沙汰してくだんすな。地なんの互ちやあやかりものと。距てぬ中の傍輩どしフシ打とけ語る折もを
 り。フシ日毎に。此處へ宵藥は吸出し。オクリ呼出し聲はり上げ。歌合萬能宵藥。きふウ、ハ。く。く。ウハ。
 ウハく。だいがめむいた。萬能かうやか。半田の町の炎代は。もみやはらげてはつてくりよ。ありやさ。こりや
 さ。ありやさこりやさ。半田かうやか。きうウ、ハウハだいがめむいた。晩にや必ず。もみやはらげてはつてくりよ

こりやさ。く。半田かうやかと中門のッシ内を見入れて立寄れば。地そりやこそ見えた更科殿。けんびきなりと何處なりと。取つて擦つて貰はんせ。此方は爰をちりがうやくとッシ入るも嬉しく更科は。中門に立出てコレ徒男。調けふもどこぞで後家娘の。肩ひねるてゝ乳ひねり。じやら付きすぎての日ぐらしか。地悪性男の可愛いは。わしが因果と懷へ。手をさし入れてふつりと。ッシ詰めるは戀の手くせかや。調是は迷惑今朝によつと。出がけから今迄に。呼こむ所が皆荒男。二十四五人もみやはらげ。日くれぬ内にとつばかは。地顔見にばつかり來たのがわるか。往んでほつしり獨ねせうともたし掛ればッシ抱きとめ。詞人に物を言はせぬ様に。又ひんしやんとなんぞいの。地今夜は往なざぬ用が有る。此方や浮氣ではないぞやとじつとしめられサア誰も。調うは氣てかたい此館の。地内へ忍んであふものかと。ッシとろけてかゝる折ふしに。詞岩根御前廣繼卿。地御入りなりと呼ばはる聲にハツト飛退き。後にく更科は言ひ捨て一間へ行く後に。勘六は用水の。ッシ桶のこかけへ身を忍ぶ。地程なく入來る太宰の大貳藤原の廣嗣は。豐成の北の方岩根御前を伴ひて。召にしたがひ參上と。廣間に通れば長屋の王子。くはんくんと出迎ひ。詞ホ、早速の入來大儀く。地と座に着き給へば。兩人ハツト御前に手をつき。詞俄の御召御説の程。推量りかね候と恐れ入つて伺へば。ヲ、いやさのみ驚く事ならず。其方達も存知の通り。我一子春日丸を天子に立てんと望みし所。なるともならぬともなま殺しの蛇繪言。べんくんと果てぬ故。元興寺の玄昉を招き調伏の法を頼みしに。此度淡路の海邊より上りし觀音の尊像。不思議の靈佛にて。都近く有る内は我慢邪道の秘法は叶はず。彼の觀音だに奪ひ渡さば。土中に埋み封じこめ。即時に奇特を見せんと慥に受合ふ。地幸かなそれなる岩根。春日丸をそだてたる功によつて。辭退に及ぶ豐成へ。詞押付て後妻にやり置しは。地斯様の折の役にも思ひしが時こそ來れ。詞其觀音は勅詔にて汝が繼娘中將姫が預り置く。地何とぞ密に奪ひ取り。玄昉方へ渡さば大願成就。春日丸を天子となさば。育てあげしそち迄も威勢は益々。廣嗣ともくすめよと。仰に乗つたる詞の合槌。詞御説の通りいかでか違背と。

地すゝむる外道に吞込む魔王。笑を含みて岩根御前。詞ヲ、何が扱く。養ひ君のお爲といひ。いき過女郎の中將姫。此頃からめつきりと。佛法歸依の地獄多き。皆目への當事。地其返報に何がな彼奴が難儀の箱。毒藥こそ盛るまいけれ。詞繼子憎みは世界の慣ひ。成程其觀世音の尊像。地盜取つて差上げん。必ず廣嗣卿沙汰せまいぞ。詞何の何の。とても口へはいらぬ娘。笑止と存ぜず御勝手次第。地君にもさぞ御満足と見上ぐる王子は喜悅の眉。ヲ、目出たし目出たし然らば先づ。奥に入つて悦びの。酒くみ交さんいざ來れと。座を立給へば廣嗣岩根。それ女中方お銚子御盃と。呼はりながら王子に引添ひ。フシ奥の殿にぞ入りにける。ハツト地答へて。妣共三方長柄と立騒ぎ。出づる中にも更科は。詞コレ二人の衆。わしや今宵は頭痛がして。氣色がわるい部屋へ引込みちつとの間。ヲ休みたいと言ふ事か。勘六殿の顔見ながら。頭痛がするは道理く。地氣遣ひなしにゆつくりと。帶紐といて休まんせ。お上の御用はわしらが勤める。戀は互と氣を通しいざ。フシお酌にと入りにける。地更科やがて部屋に入り。忍び夫の通ひ路。火燵のやぐら炭櫃とも。そつと上ぐれば下より勘六。ヤレ窮屈やとぬつと出る。ヲ、おとましや此ほこり。いつかぶせやむ事ぞ。如何に會ひたい見たいとて水溜桶の後から。下屋を傳ひ忍び合ふ。切ない戀があるかいのと。スエすがれば。共に男も取付。詞商のじやらくが元手と成つた濡草鞋。一足飛に此季から無理暇とつて宿ばいり。女夫にしろとは思はずかと。地言ふも嬉しく成程々々。詞半田の町と所は聞く。地そろく着類もやつておこ。マア人の來ぬ内とフシひつたりめきし形振を。地見たか聞いたか岩根御前差足して差のぞき。詞更科殿く。と。地呼ぶにはつと氣後し。蒲團を男に被せて置き。走り出ていや私は。詞今宵持病が差出て。傍輩衆迄斷たて休んで居ります。サアそれでも名ざしのお召し。見る體が奥迄ゆかれぬ。大病でもなささうな。地早うく立よつて。手を取りかゝればエ、そんなら。參りませうと不承無承。是非なげ首に立上り。後に心は残れどもかんづかれじと足早に。フシ奥の一間に走りゆく。地岩根も引そひ行くふり見せ小戻りして部屋の間。オクリためらひみるへとも知らばこそ。地勘六蒲

團を身にまとひ。起上つてやれ恐やの。詞膏藥賣がつがない。戀なればとて此きびしい。館の内に通ひ道拵へ忍ぶ。此方も大膽。扱今の婆めも、きついせはしない。餓鬼。あの様にやり／＼とぬかさいでも大事な用でがなあるに。まつとの所でちや／＼いれて。あた仰山に目をむいた。引とらまへてはつてくりよもの。地エ、憎い奴ぢやと部屋の口。覗く岩根と顔見合せ。ハツト驚き飛上りうろたへ廻り途を失ひ中門さして逃出るを。コリヤ／＼待てと呼留められわな／＼震ふ計りにてフシ性根正體なかりけり。詞ア、きつい怖りやう。自はな。此お館の者にもあらず。横萩の妻岩根といふ者。あながち科める筋ではなし。氣遣ひせずとマア此處へと。地思ひの外なやはらぎに少しは息つき。詞さうおつしやつて下さるれば。ほんの地獄で佛様。地お助け願ひ奉ると手を合すればア、氣遣ひ無用さりながら。詞中門から此部屋へ其なりふりでは行かれまい。地何處からどうして忍びしぞ。重ねて嗜む心なら。有様に言うたがよい。詞聞くも一ツは後日の用心。言はねば却つて心が置かれ。見遁しにも成りにくい。地生けつフシ殺しつたぐられて。地是にこりよの胸を据ゑ。詞重て通はぬ心から有様に申上ん。私生れ付いての悪性者。人の小娘後家妾。逢はれぬ所を忍び入るに鍛錬し。アノ用水桶の後腰板一枚外しおき。それから傳ふ部屋のしたや。火燵の内より這上る。地悪い事には才覺のならぬ事はないものと。語れば點頭く岩根御前。詞ハテ發明な忍びのしやう。まだ尋る事も有れども。人が聞ては爲にならず。幸ひ自ら館への歸りがけ。序に送つてくれがてら。地道々身の上話さぬか。詞何が扱／＼見遁しの御恩。地送りがてらにお館まで参りましよ。詞ア恩を知つたは健氣者。地供せよ來れとかい立て伴ひ歸る邪仁の情。後は悔の種ぞとも知らぬ男は後につき御館。フシをさして送りゆく。地かくとは知られて更科は。座敷を外し漸と。にげ出る後より廣嗣が。酔どれ妾のしたゝる目付。詞コリヤ更科の命取りめ。八幡惚れた叶へてくれと。地抱きつくをア、是申し。詞酒御機嫌と黙つてありや。爰まで來てのおなぶり。此館でそんな自墮落なりませぬと。地振り放されてひよろ／＼。詞いや其法度はおれも合點。お日てた酒の酔まぎれに。日頃の思ひ出今日は

らすと。地手を取つて更科が部屋の内へと引込むを。はてわやくなと腕放せば。そりや胴慾と又取りつく。あたいやらしいと突きとばす。はづみに廣嗣火燵の穴へがばと踏込む其上へ。ちやつと炭櫃で頭を押へ。我身をおもりに腰打ちかけ。フシほつと息繼ぎ見廻して。地扱は夫もとがめられ逃げて往なれしものならん。爰にゐては廣嗣が。立たば置くまい勘六殿の宿は兼々聞ておく。おれも逃げ退きあの人と。マア相談をと思案を極め。立上つて帶引しめ中門さしてかけ出づる。向ふへぬつと廣嗣が。桶のあひより這ひ出て。顔見合すれば更科はハット驚きにげこむを。飛かゝり取つて引伏せ。詞ヤア合點のゆかぬ死に女郎。おのれが部屋の火燵の穴へ。落ちて向ふの明を目當はひ出たれば中門の。用水の蔭察する所。盜賊ならぬ忍びの脱け道。何にもせよ横道女。地腕を廻せとあらけなく。取てしめたるひたたれの露のフシ命のしばらく繩。地危き所へ姫共。詞廣嗣様へ急のお召ぢやヤレはやう。地御前へお出と聲々に呼出れば急とは何事。詞コリヤへ兩人こいつを預る。身が来る迄に必ず逃すな。地急度申し渡したとフシいひ付奥へ走り行く。地二人は驚きヤア更科殿。なんとして縛られてと不審立てられさればいなう。詞先刻に奥で見ての通り。あの廣嗣が目を付廻しての無理續察。聞入れねば學句の果に。縛つて置てと無體な縛め。地ちやつと解いて逃してたべと。差付くればヲどれへ。詞どうであいつが唯は置くまい。マア何方へなと隠れさんせと。地何心なく引ほどけば。ア、忝し後頼むと。フシ走りつまづき遁れ行く。地後に二人は見送る計り奥より廣嗣聲高々。詞不屈女め直御詮議と。地王子を傳き立出て。庭見廻せども更科が。姿見えねばやがて立寄り。二人の姫左右に引立て。詞コリヤ今汝等に預け置いた。繩付の女めは何國へ逃せし行方ぬかせと。地目通りに突据ゆれば。詞イヤ更科殿はついあそこへ。呼んで参ると立上り。地逃げんとするを王子は透さず飛かゝつて。二人が鬚引つかんで引戻し。詞ヤア丸を騙り逃げ退かんとは。推參至極の女ばらと。地兩の小脇に引付てフシすつくと立たる時しも有れ。地表の方に足音高く。詞津の國芦屋の時澄。御注進と呼はつてあはたゞしく參上し。今朝四つ時豐成の雜掌暗時八郎。兩人急なる體相にて。大

江の岸より淡路舟に打乗り彼國へ立越候。兼て左様の事あらば告知らせよとの仰によつて。地早打にて御進進と。躍くより王子は面色あらゝげ。詞ヤアそれこそ必定淡路島の。大炊の君を呼返し御位譲らん内勤にて。豊成が下人に云付け差下せしに極つたり。地何時か我子春日丸に御位譲の沙汰あらん。詞是より一戰を催し天皇をばつ下し。帝位を奪ふ軍の首途。地血祭りは此女ばらと。首引ぬいてかつばと捨て。詞こりやゝ時澄。此近邊近郷を駈廻つて諸武士等に。王子が錦の旗を立てる。地館へ詰めよと觸をなし。扱淡州へは飛脚を立て。我領分の百姓共に。詞流人を奪ふ豊成が二人の下臈暗時八郎。搦め捕つて大炊の君も密に刺殺せと。地委細に認め廻文狀追々に下すべし急よ。やつとせり立つれば。承つて芦屋時澄御前をフシ立つて駈り行く。地廣嗣愚闇の肩に皺よせ。詞君の御威勢盛なれども。萬一官軍同心なくば如何あらんと言はせも立ず。ア、愚かゝ。それにこそ方便あれ。丸は天武帝の曾孫なれども。態と三公同位に通り。錦の旗を預りあるは。かゝる時節に軍勢を集ん爲。地イデゝ王子が計略見せんとフシ一間に駈入り。地錦の旗かい込んで躍り出てはた竿高く押立て給へば。コハリ靡き。隨ふ軍勢共。打連立つて門外に馬。乗放し聲張り上げ。詞只今王子の御催促。錦の御旗立てしと聞き馳せ參ぜし我々は。三笠の冠者廣宗木辻の九郎定俊。木津の左衛門手具の軍治花爾太郎同次郎夜中急なるお召故六具堅むる隙もなく。馬上にて上帶しめ一散に駈け參ず。地手勢々々は後より追々。御出陣と呼はつてフシ御前近く相詰れば。地王子は勇みの色をなしサア。詞天位は心のまま。地我に敵對ふ月卿雲客かたはしにぼつ立かり立。流罪死罪遠島左遷。ちくらが沖の水屑となさん勇めや。勇め廣嗣と。歩みの板をどう。ゝ。どつと踏み鳴し。勢盛んに見えたる所へ。勅使と呼ばはる寢耳に水。思ひがけなく王子廣嗣。見やる向へしづゝと。横萩の右大臣豊成。禮儀の衣冠恭しげに。錦の覆かけまくも忝しや神寶。八咫の鏡を守奉り。立入り給へばほつとりと。雷やみて澄む空に。月の出たる如くにてフシ上座へ直り。詞正しく。詞勅使の趣餘の儀にあらず。兼て王子の望に任せ。春日丸に相違なく。御位譲有るべきとの綸言。萬一疑心もあらんか

と。三種の隨一。八咫の鏡を先づ證據として相渡さる。春日君御位につき給へば。王子は則太上天王。又御預の錦の簾は三公の役。今日より某預り申せとの勅諭。地さあれば錦の御旗と。此神鏡を引替に。お渡しあれとフシ述べ給へば。地悲氣の王子からくんと笑ひ。調強敵盛なる時は偽物をもつて欺き。六國起つて子貢が辯で納めし計略。其手は食はぬ豐成。八咫の鏡と偽り。しらにせ磨の姿見。ほつかりとつかまさうとは洒落臭い謀。地いて鑄物師が荒細工。現はしてくれんずと飛かゝるを掻くぐり。神鏡ふり上げ王子の脊骨。はつしと打たるむいきの手の内。是はと駈け寄る廣嗣も直にのめらす鏡の側杖。互違に。ぶつてぶち据え。威勢を見せてもひるまぬ兩人。調勅使と思うて少しは用捨。地掴みひしでくれんずと。躍りかゝるを豐成やがて神鏡の。覆を取て差上れば。アラ有難や八咫の鏡。天照神の今爰に在すが如き光に恐れさすかの。王子も廣嗣も思はず後へたち。庭に控へし諸軍勢。フシ一同にはつと躡る。地豐成御聲高らかに。調謀計は眼前の利潤と言へども。つひには神明の罰を蒙る。勿體なくも日の御神讓儀かれし御正體。にせ物と言ふ神罰によつて。天照太神不肖の豐成が手を借りて。懲しめ給ふと。フシ思召めせ。地王子も正しき王孫なれば。神鏡の威徳のぶるに及ばず。詞水清からんとすれども。泥砂に濁すといふ金言邪念をはらひ。地神鏡へお詫あれと鏡にかけたる諫言に。恐れて王子も疊に頭を下げ。詞へ、ア誤つたり。我子春日を御位にさへつけ給へば。此上何か別心有らん。地立歸つて天皇へ宜しく勅答頼み入ると。始めてやはらぐ實義の詞。實に神國に著き。八咫の鏡の御威徳。有難くも亦。恐れ有り。地豐成王子を席にすゝめ。其身は遙に押さがり。詞不肖の臣が諫言に王子の御心やはらぐも。是もつて天照神の御恵と恐悦至極仕る。地此上は御旗と神鏡引がへに御渡しあれ。詞ヲ、何かは違背あるべきと。地錦の旗を出さるれば此方も頓て御鏡をうや／＼しく差し渡し。フシ旗を受取立上り。詞ヤア諸軍の面々慥に聞け。王子の若宮。春日丸へ御即位成るぞ。此豐成は輔佐の臣。則ち御旗を預かつたれば。武官の棟梁。大臣が下知を受くるや受けぬや。返答あれとのゝしり給へば。地皆一同に詞を揃へ。

爾我々は代々の官軍錦のはたの有る方より。外へは付かぬ金鐵武士。地御疑下されなと。平伏すればホ、さもあらん神妙々々。天下泰平國豊か。春日天王御治世と長屋の王子へフシ暇の式禮。地コハ御苦勞と廣嗣が。輕薄にのる互の露儀。いざ諸軍勢此方へと引連れ。歸る智勇の臣。大義と見送る王子の心。やはらぐ光影清き。八咫の鏡の御威徳。惡の報のまはりも早く玻璃の。鏡の曇を澄す水かがみ。濁にしまぬ豊成に。御旗の威勢十寸鏡。あら氣を。押へる臣下の鑑天下。一とぞもてはやす

第 二

歌浪のあはちの瀬にすむあ。はびや。海女が。ヨンヨ。さんやとら。ねばせて。そだ。つ。人のフシ育ちも。二神の情のしづく淡路瀉。左遷の君を牛の背に。小オクリ乗せて。口取る百姓の娘が友の磯遊び。そくはぬ連と見えざるも。フシ流石童の徳ぞかし。地大炊の君は餘念なく。これ／＼おこなあれを見や。詞今日は向ふの山々が。とつくりとよう見える。あれが四國と言ふのかや。ヲ、ほんに日和がよいぢやげに。福良の沖に霞もなし。地あんたが讃岐の金比羅山。此方が阿波の南がた。歌南がたには名所が七つ。一に大龍寺二に鶴峯三に。藥王寺四にしのへじま。五には中田の櫻が馬場よ。六に丈六。中津が岸よ。七に灌頂。灌頂瀧からの落くる水が。先にあたりて朝日の頃は。霧とまふこそ名所なれ。コレしようがへ。ナホスフシ歌の通りと教ゆれば。詞ヲあの灌頂の瀧の水。五色にわかるをいつぞ又。朝見に來うぞやサアおこな。地濱邊のしやれ貝拾はんと。フシ下りさせ給へば。濱松に牛を繋いでどりやわしも。拾うて上んと吹上の。浦の砂道しやな／＼と。フシ磯に馴がひかきわくる。地大炊の君はともすれば。戀しき方の名にし負ふ。都がひをば。フシ取上げて。入れる袂の錦がい。長地故郷遠き身なしがひ此嶋がひの草の家になでしこがひと小がひ迄。もりなくさめの供遊び。歌梅の花がひ。拾いて品よく。いろかひ姫がひ。いとらしいなりふり。數の貝取

こづまにな。サヨヲ、さりととはく。なうさて。みだれずまきのます穂がひ。鶉雀のかひもよし。すがひやさしや。ゑいやらさらとんと。とんと友の千鳥がひ。濱千鳥。あさりて後へすだれがひ。とんととんと溝がひに。ころび芦貝。フシヲいたやがひ。フシ沖の鹽がひにつこりと。笑ふつぼみの櫻がひ。君の恵みの花がひや。千草のかひはつきせじとフシひろひ。渚の日向ぼこ。地壽命薬と是もまた。出かけた親仁は庄屋の福兵衛。諸事を我慢な息子にまかせ。磯邊あるきにおこなを見付。とろく眼元てこりやおこな。詞むごいぞよ。く。と。フシしなだれ寄れば。詞ヲいやらしい又しても。白髪頭を振廻して。孫に持ちそなおれにまあ。かなへて呉れの惚れたのと。地こちやそんなこた知らぬぞやと。ひんとしられてサアそこちやて。詞其知らぬ所の思ひれ一ぱい。磯の小しどめ。ほつちりと。地言はして見たいと。フシ抱き付けば。詞ア、いやこれなぶつてたもんなと。地振放して立のけば。詞テモ仰山な。剃立頭で蜂追ふ様に。いつ言うてもびんしやんと。地どうでうそぢやと思ふけに。文でくども書く手は持たず。口で言うては向ふし。詞矢先にかけても見たし。せんばう盡きて此方の村の。道場の新發意こまづけて。諸々の難行ぶり捨て。たゞ一心一向に。おらが心の有たけはたけ書て貰うたこりや付け文。地これ見てくれと懐より。狀さし出せばヤレをかしやよう。詞子供に爺が付け文とは。地老に惚れたといふのである。道場の坊様頼んでの。よう後生願やとフシふり切れば。地大炊の君も聞かぬふり。福兵衛はせいてこりやおこな。詞老には惚れぬわごりよに惚れた。ほれた。ほんぼんに。本惚れ。くうそぢやない。此文章のうまい所。讀んだら汝もいやぢやあろまい。地こりや見てくれと封じめ切り。つき付くればラ阿呆らしい。詞そんな物まあかどなかて。地讀まるゝ物かこちや知らぬと。のけばそしたら持つて往んで。詞こつそりと見て返事をするか。地いやむつかしいと逃げ廻る。ついて歩いて無理矢理に。文をおこなが懐へ。フシねぢ込所へ歩き。久助。息を切つてこれ庄屋殿。詞王子様より廻文狀。都の時切早飛脚。地何ぢやか急な事さうなと。聞いて惻りエ、邪魔な。詞無筆のおれを知つてゐて。何故又息子の銀兵衛に見

せぬ。イヤ銀兵も留守ぢやげに。さうぢやけに持つて來た。使の人が急ぐげに。地じやけに／＼と言ひ捨て。フシ廻文渡し歸りける。詞なんでもめつたに周章てる奴。めんやうおこなを口説きかける。所へは邪魔がつく。必ず其文よう見てくれよ。ヲ慰みに見てやろぞ。地そんな阿呆を言はずとまあ。其廻文を見やらいでの。詞ヲ此廻文も見ざるまいと。言うてからがおら等は無筆。持つて往んでも息子に留守。ヤア幸ぢやこりやおこな。むつかしながらちよつと是。呼んで聞して賜らぬか。ヲ地そんなもどれ見てやろと。立寄り取つて封じめ切り。讀めるか知らぬと聞きかけ。詞エ急ぎ遣はす廻文の事。ハ、ア讀んだり／＼。じやが急ぎとは何である。地次はどうぢやとすり寄れば。詞一つ。したりあの一つも讀めるか。こりや我折れ。ヲきよと／＼とやかましい。まあおつとせて聞つしやれ。ヲ、さうしましよ。地呼んで給もとフシ小首傾け聞ゐたる。詞一つ其地に是ある流人。此度横嶽豐成が家來に言ひ付奪ひにくだす。左様の輩見付次第。搦め取つて都へ引くべし。將又流人大炊の君は。密かにさし。エ、ひそかに。／＼。ヤアどうぢや。サア密にさしヤ。さしなんと。エさし容し／＼。地目出度くかしこと紛らして。たゝんで退けばハレ滅相な。詞廻文に目出度かしこと書てきた事。神武此方有るものか。てもどぎ／＼したどんな讀みやう。どりや其廻文こちよこせ。地いやこりや此方へ持つて往ぬると懷に。入るればこりや／＼それなうては。村中へ觸まはされぬ。又道場の坊様に。讀んで貰はにやわかちが知れぬ。よこせ／＼と追廻り。何なく捕へ懷に。フシ手を差し入れて取返し。地ヲ此廻文に書て有る大炊の君とは其わつば。詞何にもせよ其奴が事。地連て往なうと寄らんとす。イヤ此おかたの事でも。さし許すのなら此方から許す。詞まあ其廻文とつくりと。讀んでもらうて知らしにござれと。地言ひつゝ牛に大炊の君。乗せて口とり一散に。オクリ後をも見ずして。フシおひかへる。地諸譯知れば福兵衛は。押しても言はず首傾け。詞ハテ面倒なさし赦せ。赦せにさしとは何の事。地とかく道場のぼん様に。讀んでもらうて安心の。決定せんといいかける。向へとはかは息子の銀兵衛。詞コレ親仁殿何してをる。村の歩に聞て來た。

廻文は何事ぢや。地どれ見よ〜と立寄れば。詞ヤイ其處な者どこのら〜。見苦しい村中の娘。子供を捕まへて。又じやらついてゐよつたな。たしなめよ〜。ハアレせか〜と何ぢやいの。親の意見を受ける様な。銀兵衛ではアごあらぬ。ごたくばらずとどれ廻文。地きり〜此處へだはいなうと。決め付けられて又脱むか。詞エツエおのれはかれになりをろぞと。地廻文渡せば引つ取つて。詞こりや封が切つて有る。もう誰ぞ讀んで見たか。ヲ、サ。急なと聞た故。隣村の磯大夫が娘のおこなが居合して。讀まして聞たが。肝心の所でよみがくだらなんだ。地サア讀め聞かんと手をあさなへ耳を濟ましてきくフシ親仁。地息子に聞いて扱なんじや。詞あまり思ひに堪へかねて。一筆申上り。こりや〜銀兵衛。おこなが讀んだはさうぢや無かつたぞよ。ハレまあ後を聞かれいなう。エそもじを思ひ初めし此かた。寝ても覺ても面影が。眼にちらちらとコリヤたはけ奴。さつきに聞いたは流人の事ぢや。おのりやこりや何處その小娘に。性根を抜かして戯言はくな。エ、憎い忤奴。どりや此方へおこしをれ。道場の坊に見て貰う。デモさう書いて有るが定。なんじや元の年末の露よりいとやすく。おちて腫くの返り事。是はしつかい骨上のお文様のやうな事。どうやら道場の新發意の。地手によう似たと聞くより親仁が俄に轉倒。詞ア、いやそりや違ふた。〜と。地あせればハレまだ何のちがを。詞さう書て有るもつと讀も。戀に焦がれてこりや讀むな。ハアテ讀まいで事がひるものか。イヤ讀まいでも事がひる。地ひる〜と蛭にしほ。フシ消えも失せたき風情なり。地銀兵衛も不審顔。詞何様にも廻文狀に變つた文言。戀に焦れてア、こりや〜。もう讀んでくれな。狀が變つたエ、どんけなと。地もがけばそんな事さうな。序に奥の宛名を見よと。開きかゝればコリヤ開な。地あけな〜と手に纏り。詞宛名を見てたまるものかと。地千々になりたるフシ折からに。地歩きの久助又駆け來り。詞これ〜庄屋殿都から。又廻文の追飛脚。直に會はうと待つて居る。急ぢや〜。地と苛だてに。親仁は幸ひ文引たくり。急なら久助銀兵衛を。ヤレ連て行けこりや急げと。せかぬ息子を無理矢理に。押立て。引立て。三裏連歸る。地倉海の中に一つの放嶋。淡路の國に年を

經し武嶋の翁磯大夫。磯邊船手のあばからひ村の支配も年だけの。役目を受けて田畠は大かた當て小仕舞に　オクリ寢覺も。樂な百姓の有べかゝりのまばらやに。大炊の君を育みて。スエいたはる心氣加よく。老の入前ゆつくりと。圍爐裏を伽の。フシ手煎じに。フシ千年をのぶる。折からに。地隣在所の戸次右衛門畠しまうて歸りがけ。詞磯大夫様お内にをるか。エ戸次右なんと思うて。サアのぼらつしやれ茶もわいてをる。一つおまそか。イエお構くんざりますな。少御無心に來りました。ハテ無心とは何てかの。イヤ何ぢやれ別の事でもござりませぬ。あんたの六兵とつれなうて。明日夜の内から伊勢参り。へ、それぢやけに船切手。書いてもらをと存じてと。地腰かくれば。詞ヲ、易いこと書ておまそ。寒空に向いてから参宮とは奇特々々。地信あれば徳あると硯を引よせ墨すれば。詞イヤモそりやおつしやるやうなもの。御神様のおかげでやら。地今年も作はどうやらかうやら。世間並より賃入も多し。よい綿もふきます。詞ぢやけれど。近年王子様の領分になつてからめつきり取めがゑづいけに。此方とがやうな下作は。たまるもんぢやござりませぬ。サアそれで田畠借す者も難儀でござる。扱船切手は六兵と二人か。イヤあのわろ親子うら親子。四人連れてござります。ハレよう子供を参らすなう。サア是も兼ての願はどき。足らぬ所は杓ふつて。へ、報謝参りに致します。地ヲ、其心が納受が深いと。挨拶しながら切手を認め。フシ印判出して押す所へ。地隣在所の歩きの久助。息を切つてこれ戸次殿。詞扱たんねたやれちやつと。地村に大きな公用で皆寄合つてぢや。ゆつくりと何して爰にぢや。さあゝとせり立てられて。詞いやおらは参宮をするけに船切手。ハアテ参宮所ぢやない。皆待ち兼ねてぢやヤレござれ。地ナウやれ早うと引つ立つて。フシ喚きちらして速歸る。地磯大夫は船切手。持ツてうつそりハレ急な。詞公用とは何事ぞ。地心許なし此切手は。又とりにわしよ迄と。懷に入れ表口。フシ見やる向ふへ娘のおこな。大炊の君と濱邊より戻る心は斑牛。小屋に繋いで息せきと。歸れば父はやれ娘。詞外へつれまし遊びに出たら。ちよつちよと何故に戻らぬぞ。おらは隣の福兵衛が村に。何やら公用で寄合ふげな。地いて聞て來う留守をようせよ

と。立上ればイヤ父さま。詞寄合は知れて有る。此事であろま。是を讀んで見やんせ。地どりや／＼何ちやと取つて開けば。詞都より長屋の王子の廻文狀。地一々讀んで呆れし顔色。大炊の君は打しほれ。ナウ其文見んと立寄り給へば。詞イヤ御ろんじやる物ではないと。地隱せば御目に涙を浮かべ。詞最前おこなが濱邊にてよみしをあらまし聞いたるが。王子の方より我身をば失へと有る事成るかや。地豊成が言付て奪取に來るとは如何なる企か恐ろしと。稚心におろ／＼と。フシ御物思ひの御顔ばせ。地見るめ哀れと磯大夫力を付けて是まうし。詞此廻文に書いたやうには。あまうまいなんのさせましよ。氣遣ひなされなお前の事は私が都へ上つた時。伯母御天皇様のお直の詞に。大炊の君をいたはり不便を加へ。息災で置いてくれ磯大夫と。勿體お頼。案じさつしやりますな。如才もなう守をだて。地御成人させますと。受合てとつばかは。戻ると其儘お前様を。よその村より呼取り。お隠ひまうすからは。都へとては歸さぬ分別。詞もと此淡路の一國は。おのころ嶋と申して惣日本の國の始り。何とぞゆく／＼此嶋に内裏を建ててお前をば。淡路の廢帝様と仰がんと存ずるから。村中の下百姓にもあらましは吞込ませ。若もの事が有る時は。アノ水太鼓をどん／＼と。打つとさう／＼集る筈。王子からでも豊成からでも。萬人して奪ひに來うが。此國へ他國から入込む事はかまはね共。地にしなには此磯大夫が。船切手と言ふ物を書いてやらねば一人も。去ぬる事ならぬ離嶋。フシちつともお案じなされなや。地こんな廻文ごくには足らぬと。ずん／＼に引裂いて圍爐裏へほりくべ。詞こりや娘。したか濱邊の遊び歩行は。隣の在所ぢや遠慮せよ。萬一お怪我をさせましては。天皇様に受合つた詞が立ず其方にも又。ひよつと傍枝くはそも知れぬ。地内で遊べば氣遣ひないと。聞て娘も顔色なほり。大炊の君は胸落付き。ヲそんなら嬉しい磯大夫。今から濱邊へ此方らは行ぬ。奥で遊ばと稚氣に人目を恐れフシ入り給ふ。地御心根のいたはしと。フシ見送る折節表の方。けはしき足音何事ぞと。言ふまほどなく旅姿太童なる侍が。息を切つて内へかけ込み。詞某は旅の浪人。九州邊へ奉公の目見えに下る。船中にてふと口論をしだせし所。乗合の騒ぎと船頭が相手同士。

磯へ上りしが相手は多勢。漸く切抜け此通り。地委細は緩々後にて申し出さん先づ。かくまうておくりやれと。せきにせいたる詞に當惑。詞ハレとでもない百姓の。年寄つた身で、侍衆の喧嘩の尻が持たるゝ物か。地かくまうてとは思ひも寄らず。外人をお頼此方や知らぬと。相手にならねば。ヤレ情ないなう親仁。詞家を見掛けていふ無心。隠はれずとも片陰に。地暫く姿を隠したし。事急に及んだと。フシうろつけば。詞ハテ迷惑。つい影隠す計りならそれ娘。ちつとの間背戸口の。灰小屋の片隅にても隠して進ぜ。いかしやませと。地聞いて悦び然らば御免。娘御頼むと打連立ち裏口。オクリさして。忍び入る追ひつづいて駈来るは。言ひしに違はず相手の侍。ずつと踏込みこりや／＼親仁。詞狼藉者をつけ込んだり。何處へ隠せし是へ出せ。地此ひだてせば汝もゆるさぬ。さあどうぢや。卑怯者めもでさらぬかと。拔身を引提げ鐵壁も。フシ突抜かんずる勢ひなり。詞ア、是卒爾なお侍。そんな人は爰へは來ませぬ。門違へてかなござりましよ。地はれやれめつそなお方やと。そらさぬ顔つきヤア偽るな。詞慥に此家へつけ込んだ。地諍ふからは家探せんと。フシ奥を目がけて入らんとす。立塞がつてそりやならぬ。詞百姓の茅屋は武士の城郭。知らぬと言はゞ足下の。明い内にとつととお往にやれ。地かう出した手に十人力すわ骨達者な堅親仁村で口聞者共。土に付ぬは恐くないと。フシ大手を擴げふんばつたり。詞ヤア面倒なやせ親仁。地妨して怪我まくるなと。突飛ばされていや申し。詞かう先づ力んでとめさするも有様言へばお爲づく。高が途中の振がかり。見ず知らず同士口論さうな。調べぬいて手柄にならず。地御主人持なら私の端喧嘩くらゐで討果すは。扶持知行を盗むも同然。御浪人なら出世の妨。相手が逃げたりやおまへの丸勝。御一分は立つと言ふもの。止めるを機にお歸りなされ悪い事は申さぬと威して行かねば理詰でかゝる。武嶋の翁が老功の。詞にハット。フシ氣のつく顔色。地小首を傾け。詞アツア實に誠に。時の張合若氣の至り。地さうぢや／＼近頃龜忽と。フシ刀を鞘に納むれば。地翁はおち付きヤレ嬉しや。事になつては所の騒と。氣の毒餘つて出次第に慮外がましき強意見。聞入れ給ふは流石に武士がた。詞御了簡遊ばして。スリ

やお歸りなさるゝか。ハテ了簡を致さいでは。貴殿の詞理に當り。竊迦孔子にも劣らぬ教訓。地過分々々と過つて。
 改め直す打とけ詞。詞叔御亭主氣の毒は。兎や角せし内日も晩じる船は遙に帆かげも有るまじ。地殊に此國不知案内。
 近頃申し兼たれ共。一宿させておくりやるまいか。詞イヤアそれは。地と言はせも立てずア是さく。詞武士が一旦
 了簡せし上。たとへ相手の侍が。今爰へ出て某が。地頬を踏むとも言ひ分なし。刀冥利と金打し。餘儀なき仕掛に。
 フシのつひきならず。詞ハテそんならさむくとも。此一問で明してござれ。地百姓の事なれば何進せす物もなし。
 詞いや一夜の宿が大きなお情。地必ず／＼お構ひ無用。此煙草盆お借申すと提げて。フシ一間に入りにつけり。詞ハレ
 迷惑な押付客。地ちやつと相手の侍を。往なしてしまふと入らんとす。奥よりおこなが膽紫色。すた／＼聲でノウ父
 さま。詞さつきに隠れた侍が大炊様の側へいて。何やら私語き無理やりに。連れまして裏道から。地逃げたと聞いて
 南無三寶。都の忍びに騙られし今。此一間へ泊つたやつ相ずりめに極つた。村中集どけはかさん。詞それ／＼娘太鼓
 うて。地アツトおこながよせ太鼓。けはしく打てば何事と。コハリ在所が追々につけ着れば。磯大夫無念の面色。
 詞アレ村の衆。隠ひ置いたる大炊の君を。騙めに盗まれた。此國七里四方の外。某が船切手。書いてやらねば渡海は
 ならねど。地騙されたが腹が立つ。詞まだあの一間に。相ずりの侍奴が残つて居る。地憎さも憎し存ぶんに仕やうが
 有る。立寄つてくゝ上げて下されと。頼めばまつかせ何にもせよ。庄屋殿を蕩させては村中の名折になる。我組伏
 せん引くゝらん。どりと細引荒縄よ。地なうたが早いと。フシ薙めけば。地障子の内よりねだれのどす聲。詞是々
 いづれも。此方左様の者でおりない。武士でおりやるぞ侍ちやぞ。卒爾召れて後悔有るなど。地聞てせきたつ磯大夫。
 詞ヤア落付き詞のゆすりかけ。武士でも鬼でも高が一人一度に掛つて障子を蹴放し。地引ずり出してぶちめし。腕
 ねち上て盗人の。法の通と言ひ捨て。恐がる娘の手を取つて奥の一間に。フシ入りにける。地身拵して百姓共。さ
 あと聲かけフシ立向ふ。地障子をくはらりと内より開き。煙草盆さげのうのと。出る姿は唯者ならず。人を囁とも

思はぬ手強さ。むさとも寄られずさうくが。フシ唯わあくと聲ばかり。地此方は猶も不敵のみずまひ。煙草の煙を吹きかくれば。詞イヤなめ過ぎた此煙管と。操にかゝるを小手なぐり。飛のく後へ双方より。取つたとかゝる兩拳。胸どりともぎの車投げ。地もんどり打たせば残りの百姓。詞ヤア腕づくなら氣が出来た。地面白なつたと入代り。立かるを事ともせずもつて開いて。三重詞へばたくすな。江戸とがさうな相手を取つて伏せ。右へ投げのけ左へのらせ。コハリ邊へよせねば手捕にならじと。皆起上つて得物の農具。手ん手に取つたるからさば打。詞シヤ面倒なと抜き放す。地劍に恐れ一度にわつと。逃ぐるを奥へ追込んで。フシ出る後から又むらがり。しつこうかゝるを叶はぬふり。ついと退出で門口の。フシ木蔭に忍べば。通ざじと。追かけ出しが見失ひ。詞どつちへ失せた其方か。地こつちか遠くは行かじと。フシ當ともなしに追うてゆく。地やり過してそつと出て。立歸つてうそくと。用有げに奥見廻し。フシ又一間。にぞ隠れる。地騒ぎに恐れにげ廻る子に付き歩いて磯大夫。下知さへならねばコリヤおこな。詞足手纏ひぢやそちはまあ。隣村の蕨のきは。地戸次が邊りへ退いてゐよと。押やられておづく。表へ出しが駈戻り。詞ヤレおつとろしやよう是とつ様。大炊様を盗んで往んだ侍が。肩ふり歩行て来るぞやと。地わななき震へば親仁も共に。氣を取のぼして。詞どりやうせるか。待て大騙めどうする見よと。地あはてる心をあはてぬ身振尻。引からげつ。おろして見つ。フシ駈り廻つて。佛壇の下より取出す大威し。一尺五寸男の魂。是きめたればもう氣が据る。詞何の滅多に恐ろしがるなど。地娘をかひとつかと坐し。膝のふるひを押へる力み。弱身を食はじと。フシ待かけた。り。地程なく来る以前の侍。上下立派に黄金を。並べし臺を日八分。禮儀亂さずしづく立入り。こやちばり返りし翁が前に恭しく臺を置き。諸手をついて詞を改め。詞拙者めは。都横萩右大臣豊成が雜掌。左京之進晴時と申す者。後より喧嘩の相手と僞り入り込しも同傍輩。久米の八郎景勝。主人豊成内勅を蒙り。大炊の君を密に迎ひ歸るべしと。我々兩人に申付け罷下し候へども。此國は長屋の王子の領分。容易は渡されまじと。憐愍ふかき貴殿とも存ぜず。よ

しない騙事を申し入りこみ。まんまと大炊の君はばひ取り。立歸らんにも船場にて。武嶋の翁磯大夫の。切手なくては船に乗ぜじと申すに付き。これに困りし一つの難儀。又一つには大炊の君を。是迄いたはり御育み下されし返禮かたゞ。輕少なから黄金拾枚。御受納有つて恙なく。都へ御供申す様船切手を賜らば。地莫大のお情と。ステテ頭を下ぐれば磯大夫。返答もなく佛頂面。ずつと立て白木の臺ばつしと。踏くだく。音に堪へぬ短氣の八郎。出んとするを晴時がハアテこりや。詞こりやお腹立尤もなれども。ナそこを了簡。堪忍のならぬ所をナ翁殿。地幾重にもお膝を抱くと。一間へ聞する詞と知らず。磯大夫目を剝だし。詞ヤ推參なる大騙め。たとひ偶を拵へて。大炊の君を盗まずとも。何故あけすけにて連歸らん。まだ其上に此贈物。金に目がくれ船切手。書いてやりそなおれちやと思ふか。一度ならず二度ならず。言語道斷しかたが憎い。出やうが悪い。出直して大炊の君を連れてこい。此磯大夫は。王子様の領内に住むお百姓。豊成殿の下人めらに。禮物うける覚えは無い。今一人のどろぼうめも。村中の者共を。投げたり踏んだり暴れる。此方も意地ぢや。此由を王子様へとつくりと。注進申さにや往なされぬ。それ迄うぬ等が命を繋ぐ。地かに此金持つてうせねと。蹴散らし蹴とばし娘よ來いと。引連れ奥に入りけるは。フシ若々しくも理づめと説。返答なければ久米の八郎。堪へかねてとんで出て。エ、まだるい晴時。詞先達一間で聞けば。切手なくては渡海ならずと。ぬかせし故ひつ捕へ。書かして後より追付んと。思ふ所へそなたが來て。見事取るかと控へてゐれば。存外ずがいな目に會うて。どんくさい何うつかり。地いて踏込んで慮外のゑだ骨。ほつきく折ゆがめ。首筋押へて船切手。書せて見せうと駆込むを。引留めてコリヤ。八郎。詞郷に入つては郷に隨へ。短慮出しては仕畢せられぬ。大炊の君を人知れず。地背戸の岩屋にお隠し申す。汝は急ぎかけ付て守護申してくれ某は。一應も再應も。翁をなだめ船切手。受取る迄は此家は放れぬ。フシさあゝ急げと押やれば。詞イヤそんなことまどろしい。其方お側へ往いてたもれ。地なんの書かすに手間隙いらぬ。おれが残ると意地ばれば。詞ハレ呑込の悪い男。あら立てゝは事の破。おれに任して岩

屋へ急げ。地かういふ内も大炊の君に。凶事ある時は兩人が。始終の工面も皆徒事。詞忠義にならぬが其方は。しめし合せを用ぬ氣かと。地たしなまされて不承々々。詞サアいくはいの。地行くまいといふにこそ。詞おりや行く程に随分早う船切手書しておぢやれ。地晚いとおれが來たうなる。エ、もどかしいと呟き。岩やを指して。フシ急ぎ行く。地晴時は首尾見合せ。又折入てなだめる思案と。散らせし黄金取集め。オクリ一間のへ内へ入る後へ。地くる歪み類となり村。庄やの福兵衛が一番子。繪網の銀兵衛のさばり聲。詞磯大夫殿お宿に居るか。會をそや會をそや。地公用ぢやきり／＼出られと鳴り込めば。詞ナニ銀兵か。公用とは。地なんぢやなんぢやと磯大夫。立出づればどさりとへたかり。詞イヤ何ぢやれ別の事でもござあらぬ。是の内に隠うて有る。流人のわつば大炊の君を。王子様より。ヲくど／＼と言ふに及ばぬ。今日此方の親仁をたらし。おこなのませが。すりかへて戻つた廻文。此方も讀んで見たである。其後から其事を追々の早飛脚。村中をよせ談合して。おらが首うつ筈にきめた。連れて往んでしやつふりと言はさにやならぬ。もし意地ばると。地何處でなと仕舞ふてのきやけうと。詞コレ脇差用意して來た。何處に居る。地出して貰をと膝まくり。フシかた身をゆするぞ憎手なる。地正直きなりの磯大夫。つくろひもなく氣の毒顔。詞サア何如にも今日の廻文見た。したが其大炊の君はたつた今驕にあひ。盗まれて是にはおはせぬ。ヤなんぢや。此處にはをらぬ。居らぬで済むか。よその在所にへちまうて居る物を呼びよせ。大切さうに隠まうて。今殺せとある廻文見てから。盗まれた。そんな事くふ銀兵衛ぢやない。手めはあかつた四も五も要らぬ。出した。地／＼と腰を。つかふ詞も意地くねわるく。蟲に障ればハアテ扱。詞盗まれたに違ひはない。地うそなら家探して見やれ。詞ム、家探しせよとは丈夫な出様。それで聞いたと割符が合ふ。袴を着た侍が。金持つて來たのは何ぢや。わごりやわつばを金にしたの。棺へ片足ふんぐんで。地慾煩なへび親仁サア。どこへふけらした。フシ其先聞こと揃よれば。詞イヤそりや知らぬ。地知らぬとは横着など。胸元掴んでコリヤ親仁。詞金をわぐねてふけらして。ぬつくりと此顔で。騙られた

と此口から。ヤ此頬けたから。地ぬかすがかたりと。横面はつけ蹴とばせば。ぐつと込あげこらへぬ蟲。氣のせく抜きうち一尺五寸。あてと違うて小鬚先。そがれて立退き。詞ヤア老ぼれ。おのりや銀兵衛を斬つたぞよ。ヲ斬らいては惡者め。なま若いなりをして。言はせておけば方圖もない。金取つたとはま一度ぬかせ。イヤ大ずりめがたけぬくしい。地たけぬくしいとは其あごた。切割つて村中の。日頃の鬱憤はらしてやらんと。討つてかゝればハテしやらなと。抜いて拂へば又切り込む受けつ。洗しつ水論の。意趣迄持たす。フシ互の挑み。地氣は頑丈でも磯大夫。腕先弱る老のくれ。血氣盛の一打に。ずつかり切られて尻居どうど。フシへたりながらに切結ぶ。地おこなは見るよりの悲しやと駈寄つて。銀兵衛が双の下に縋りつく。手負の父はヤレ娘。かまうて怪我すなのけく。と。あせれば氣強き此方の惡者。詞ヲこいつがだゝい廻文狀。持つて戻つて見せた故。おれが手柄の邪魔ひろぐと。地喉首擱んでひつさくれ。詞ヤア其娘をなんとすると。地よろぼひ立てば娘の喉へ。切先つき付ケ。詞こりやこびるめ。おのれが理を知つて居る。サアわつばをやつた先ぬかせ。言はねば殺すが言はぬか突こか。ヤア老ぼれ。双向ひだてすりや親子の別れどうぢや。地何と胸つくし。力に任せ締めつくれば。物は言はれずびりく。とふるふ娘の姿を見て。ヤレ手向ひせぬ待つてたべと。拔身を捨てどつかと坐し。詞其子が知つた事でもなし。助けて下され是拜む。地ゆるめてやつてと手を合せ。俄に弱る。子故のやみ。取亂したる。親子の有様も當て。られずいぢらしく。地弱みを見込んで猶圖に乗り。詞ヲそれ程此奴が許してほしか。地おのれわつばが行方を言ふかと。手詰のせこめ一間より。目當の手裏劍眼つぶし。はつと驚き娘の胸元。放せば晴時とんで出。銀兵衛を引伏せ拔身をもぎ取り。ぐつと突込む心元。剣り廻せば磯大夫。ヤレ有難や忝なやと。悦ぶ聲も痛手のすたき。苦しいかいと抱き付き。スエテ擦る。娘の顔じろく。眺める父は不便の涙。側に見る眼の果なやと思ふ程猶氣もせかれ。晴時立よりノウ磯大夫殿。詞息女の御難を救ひしも船切手を貰ひたさ。地見れば御邊も急所の深疵。保養の筋は見え難し。何とぞ命の有る内に一筆書いて給はらぬか。

大炊の君を恙なく歸す功徳は廣大無邊。未來の爲も惡しからじと。頼めば翁は成程々々。詞王子より廻文狀。追々來れば一刻も。此地に在して御爲ならず。地取わけ只今娘が急難命を助け下されし。御恩報じにお望なくとも。認めて參らせたし。とは言ふものの最早目くらみ腕叶はねば。一點も引かれまじ。詞幸ひ最前參宮人に頼れ。書て置いたる船切手是に有り。是を持て船中迄。伊勢參りの姿にやつし。地目出度く都へ大炊の君を。御供あれと懷中より取出せば。晴時受取忝しと。押戴て讀下し。詞何此切手の表には參宮人四人と有り。都へ歸る我々は主從三人。人數の不足若船場で。咎にあはじ如何答へん。翁殿と念を入るれば。地のう其切手の都合には。此娘を人數に加へ。都へ連れて貰ひたし。詞我なき後て此嶋によもや生けては置きますまい。心にかゝる此子が事。地凡性あるものとして。子に迷はぬはなけれども。わきて親き親心。繰言ながら聞いてたべ。詞彼が母めは迎へてより。添ふに随ひ根性の。さがない女と見限はて。十三年前去りこくり。二ツの年より繼母に。かけるもつらしと後妻を持たず。地やもめの膝に抱きかゝ今年十五の此背丈。手鹽にかけた一人子をむざゝ双て殺さりよと。思うて死んで浮まれませぬ。現世後生の。フシお助ぞや。地必ず都へつれて給へ。田舎生れのおぼこ者不束な奴なれども。親の因果でまんざらの下司奉公もさせともない。とても事の御慈悲にお情ありげな晴時殿。此方へ養子進ぜたい。貰うてだに下されば娘が出世と悦んで。最後迷す成佛致す。未來を救うて給はれと。いふ舌の根も拜む手も。重く閉ぢたる上まぶた。コレなうとつ様く。と呼付けられてほつちりと。開く眼元の。哀れさを。見捨られねば晴時すり寄り。詞コレ磯大夫殿。おこなは今より拙者が娘。早速切手の人數を合せ。御供申す君への忠義。地女にまれ者つれ歸り都て名ある聲を取り。此晴時が名跡を。追付繼する體に思ひ。心安く成佛あれと高らかに呼はつて。歎く沈む娘の手を取り。立上れば今はの翁。詞ハツア其お詞が知識の引導。おこな聞いたか隠々の。武士の娘に成るからは其方はいかい果報者。おれも結構な金色の。佛様の在所へ行く。泣くな悦べ晴時殿。地おさらばさらばが一世の別れ。五十遙に打越せし。フシ浪の泡

とぞ消え果てたり。地わつと泣入る娘をば。抱きかゝへてな泣いそないそ。無常の世界武士の子は泣かぬものぢやと親がひの。勵ます詞。子心に涙を胸に押かくし。聞入れ立つも。いたはるも何れ義理有る親と子が。大炊の君をお供して。都へ歸るは亡き人の。末期の。一句に都合ぞと。諷め。すかしてやうくと船場を。指して急ぎゆく

第三

地時につれ花も紅葉もかげ隠し。霜に打れて盛をば。待つかひもななき横萩の右大臣家の一人姫。中將姫は時ならぬお下屋敷の花園に。何をながめか冬至過ぎ末の四日は御所中の。一季半季の出替日。蠅が往ぬると戯れの。上の仰が末の代に。フシ大師講とてものではやす。地お傍遣ひは桐の谷とて。久米の八郎景勝が。妻とフシよばれて。主思ひ。オクリお部屋を。離れしらすに立出て。お末の女中と呼聲に。あいと答へて二三人心得顔に立並ぶ。詞誠に今日は霜月廿四日下下の出替日。残りの衆は皆年季。何れもは一季の約束。先の季も勤る氣か。地志はと問はれて後達詞を拵へ。詞相變らず御奉公地お目かけられてと詞敷を。言はぬが重疊めてたしく。詞扱お姫様づきの若黨中間。あなりの者は呼ぶに及ばず。望ある者斗り。地呼出されよと言ふに隨ひ。承つて三人が立間も口はたゞ置かず。詞同じ事なら若黨の林平殿と先の季も。一つにゐたいよい男と。地囁き合うて勝手口。詞若黨衆中間衆。別けて袖岡林平殿。先の季極めのお召し。地はつと答へて聲揃へ。先の季極めぢや無禮すな。手ふりはおかち先催へ。次はお草履挟箱。長刀持も姫君の。御祝儀祝うて先のけくなくないくなくとフシ。踊る。地張面擴げ桐の谷藏先に差出。詞今日は例年の通り一年の極目。望あるはそち達斗りか。一人づつ出て願ひ事。地言うて見やとやさかたに。さき手を押退け私めは。詞お草履取り品助めてござりまする。是迄二兩二歩の給金。三兩になされて下され。と申は。髷油ががいに高直に髷成り。下直な膏藥に致さんと存ずれば。落ちたら知らぬばれても知らぬと申す。お公家方に入らぬ髷髷。剃りこくらうと存

ずれども。親に離るゝ様に存じて不便に。ごはりまらずでござりますると。地なまりきなりな。フシ願ひもをかしく。地髭油程の事ならぎんだしとやら言ふ。足してやろと。重き口合有がたく。フシ引込む後へ髭もなき。ぬつべら男はお挾箱。角平めてござりまする。詞某一人の繼母ありて然も鬼婆。せぶりはいても取りたがる其酷さ。譬へて言はゞお家の姫君同然の私が身の上と。地言はせも立すヤイ。詞そりや何を言ふ事。生さぬ仲でもお袋岩根御前様はお情深く。其方達が繼母とは違ふ。へ、成程。岩根様酷ふもござりませぬが。ハテ扱まだ言ふか。母の養ひはしくば品助同然に増してやろ。地ひなりに居よと帳面に。點をかけたは天の口。フシ塞ぐも流石金ならん。地次の剃下着む事。言はんとするを桐の谷聲かけ。詞其方も惣並の立身。地變らずるよと思ふ圖へ。丁度参つた長刀持。フシぐつとも言はず入る後に。地若黨袖岡林平が訴訟ありげに座に直る。外とは違ひ詞もやはらか。詞そなたの事はお上にも御大切に思召し。何によらず望む事。叶へてやつてとゞめよとの仰せ。地御扶持でもお金でも。望み次第と言はれてハツと地に平伏し。有難いお詞おして申すも憚りながら。詞私めは此季からお暇を下されなば。猶もつての御厚恩と。聞いて桐の谷肩に皺よせ。詞そなたの事は中途よりの奉公人。有付時は幾年もと言やつたを忘れたか。帳面見れば拜借も八兩一步。欲しくば呉れうと思召すお上のお心。地其慈悲なお家を見捨て達つて隙をもらふとは。仔細が有らうをそれ聞こと。おされて林平。懷より金一包取出し。よんで八兩一ふんを。立つる心で繰はなにさし置き。詞仔細と申して我々しき。まづ借用のお金返辦。地御受取りと立派な仕方。ほつとせしが言ひがかり。金取つて投返し。詞ヤア僅な金を催促と。思うてわしへの面當か。但しは不自由なお家と見立て。返済するか慮外者と。地險で威せば猶頭を下げ。勿體ない何しに左様。唯美うお暇を。申受たい望ばつかり。御前のお取なし偏に頼み上げますと。素直に怒の立矢もなく。詞すりやどう有つても隙取る氣か。他の奉公望にあらず。引込んで刀をやめ小商でも致す所存。ハテなう。是程迄言ふに得心なくば姫君へ申上げ。お隙貰うて進せう。暫く是へ上り。地待つてござれと挨拶が。もう

改まる表むき。奥の一間へ入る内も　オクリ心をへ殘し。別れゆく。地常は遠慮でより添はぬ。中居はしたは時を得て。なう林平殿此處へ／＼と招きよせ。詞聞けば此方は引込むとや。一人身の宿ばいり。不自由にあらうおれ行こか。いやわしが行て飯たいて。地赤子産ましてもらはうと。縋りすり寄る中にも早蕨。二人を引きのけコレ袖岡殿。詞亥の子の餅の据臍に。子の子の餅はいくつぞと。問うたを此方覚えてか。地手づけ渡した此女房。いやぢや有るまいなう／＼と。抱き付けばもぎ放し。詞片木に乗せたはわしが臍。結んで置たは目と。フシ引退けせり合ふ其内に。地桐の谷が聲しはぶき。はつと立退く出合頭。見ぬふりしてナウ女中方。お部屋が暗い燈火の。用意と残らず奥へ追やり。詞林平殿お暇の事姫君へ申上げたれば。直にお逢ひなされんとお事。有がたう思うたがよいぞやと。地言ひ聞かす内名香のかをりにフシつれる。倅や。たそがれ時の夕顔の花とや言はん深みどり。オクリ柳の。眉に水晶の御目の爽かさ。雲の上なる天人の。天降ります心地にて。フシ思はずはつと平伏す。地座に着き給ひ中將姫。若黨の林平爰へおぢや。近う寄りやとのお詞が。骨身にこたへ有がたく。猶も疊にひれ伏して。御免々々にとにじりよる。詞ハテ苦しうない大事な。地誰に遠慮と及び越。瑠璃の様なる御手にて。引寄せ給へばぞぞつと。身の毛立つ程嬉しさと。フシ恐さとまじる胴ぶまひ。地コハ何事と桐の谷が。驚く色目遠慮なく。詞林平そちは聞えぬぞよ。花見遊山の供先で目顔で知らせど知らぬふり。見ぬ振するは惚れられまい。地思はれまいとの用心か。姫共とのじやらくらは憎い男と手先をば。じつとしめられ猶がた／＼。我身を我と思はれず。夢か現か夢ならば覺めてくれなと　フシ身を縮む。地預る桐の谷走り寄り。持給ふ手をもぎ放し。詞はしたない姫君様。人にこそ寄れ若黨づれの。手を取つてコリヤ何事。其酒が長じたの。其お心故繼母若根御前の憎みも強く。夫八郎他行の間も得お傍を放ぬはいの。おまへはまあ何と心得てと。地意見にかゝればア、おきや／＼。詞若黨づれと蔑しやれど。其もと問へば二柱。産れた故郷はたつれも變らぬ。父豊成様の仰せにも。おれも後づれを持った程に。我も好いた男もてて。粹なことの。恥かしい事ぢ

やが。此林平を見初めてより思ひにしづめど折もなく。地はや隙貫ひ去ぬるといふ何時迄人目が包まれう。許してたも桐の谷。惚れたはいのとひつたりと。抱き付き給へばヲ氣疎と。引のける人あせる人。思はれ人は果報すぎ。フシ冷汗流しゐたりしが。地立直つて手を仕へ。詞お氣づまりの鬱性を。お晴しなざるゝ爲にもせよ。身に取つての有難さ。地死しても忘れず。フシさりながら。地御大切な御身戯れ言を誠に取なし。沙汰致してはお爲にならず。八郎様の奥様。詞ありや私をおなぶりなされ。お慰みの笑ひ草と。地言ひ紛らせば姫君は。胸慾なことを言ふ人。詞慰みにも偽にも惚れたと直に言はれうか。聞入なくば胸を据え。地覺悟極た證據を見しよと。守刀を懷より。取出し給へば桐の谷驚き御手に縋り。詞コリヤあんまりで興がさめる。お怪我が有つては氣の毒と。地取らんとすればいや／＼。詞どうて其方が邪魔する顔付。林平も聞入まい。言ひ出した事恥かいて。地何の生きて居ようぞと。振切り給へばもて扱ひ。詞成程お前の志お詞立てうさりながら。二度とはならぬ今宵一夜。お伽ささうがそれ切で。ふつゝり思ひ切らるゝか。地それが厭なら死になりと。フシどうなりととも突き離され。地ハテ思ひ死に死なうより一夜ちよと楽しんで。成程と思ひ切りましよと。仰にやう／＼双物もぎとり。詞ノウ林平殿お聞の通り。ひよつとお怪我が有つては。こなたもわしもお上へ立ず。不承ながら今宵一夜は酒のお相手。お伽中で下されと。地雪はれてどうやら氣味悪く。返答なきを姫君。詞幸ひ晝より九献をはやし。盃半ぢやおぢや行こと。地引立て給へばイヤもうし。詞酒のお相手ばかり。お寢間は御免と斟酌も。地大事なわいのと無理矢理に。伴ひ給ふ障子の内。早弾きかける三味線のオクリ調子に。性根狂ふらん。地後にフシしばらく。桐の谷は。何を思ひの一思案。ステテ心をすます折からに。廿餘の女房のはらげし髪も兵庫わけ。小灯燈さげ廣庭迄。フシ遠慮もなけにさし覗き。詞是もうしお女中さん。若黨の袖岡林平殿に。ちよと合せて下さんせ。内から迎ひに來たと言や。地合點の筈と一口に。ひつこなしたは袖岡が妻と悟りし眼推量。是幸ひと桐の谷は。詞ノウさう言ふは林平のお内儀か。地大事な此處へと柔かな。詞についてのし上り。詞ど

なたかは存じませぬが。お優しさうなお方。私が連合は今日切つて。お暇を貰ひ戻らるゝ筈。今朝からうちを掃除して。待てども待てども音もせず。こりやあんまりぢや見て來うと。留守を頼んで参りしと。地世帯じみた話にわざと。フシ物有りさうに顔打ながめ。詞愛しや此方は騙されて。何にも知らいて迎に來たか。地高いもひきいも女子の身は。相手互ちや言うて聞かさう。詞林平が隙貰ひ往ぬるとは大きな偽り。此家の姫君中將様と。毎夜／＼の酒盛。お寢間の伽までつとめるわいの。エ、なあに嘘ばつかり。私に腹を立てさすやうに。初對面から輕骨。ムウ偽りと思つてなら。しだらを見せうコレ爰から。地障子に映る影を見やと。教へる手先のフシ折も折。地林平が聲として。詞古襦袍で姫君の懷へとは勿體なし。いつそ裸身でぐす／＼ぐす。地お約束の盃と差すやら引くやら押へるやら。あなたは二上り此方は氣上り。くはつとせき上げエ、腹のたつ。大畜生の男め隨こんで引ずり出し。存分言うて腹いよと。小棲引上駈出すを。立塞がつて押戻し。詞いやのうさうはまあなるまい。とは何故な。なぜとは。そなたがふん込み。わつばさつばになる時は。姫君は流しもの。林平はお仕置。首討るゝが合點か。ヒエ、なんと。大事の前の小事。早く騙して美しう。連れて去ぬる思案はないか。地悟氣所であるまいがと。理にせめられて胸がつくり。腹立よりも案じが先立ち。地ハア如何様家來が主の娘。犯した罪はどこでも討首。詞どうぞお前のはからひで。呼出す事は成るまいかな。詞いつかないかな。片時も傍を離れず願て跣下地。其上女房が來たと聞いたら。戀の意地はり心中だて。地猶氣をもつて動まい。爰は何とぞ往なねばならぬ。仕様があらうがハテどうがなと。頼まぬ事を苦にするとは。知らで女房すそこをお頼み申上げます。詞ありやうは悟氣よりお仕置と有るでほつと當惑。地どうぞ夫が戻る分別あそばしましてと氣を焦つ。性根を見込んで聲を細め。詞コレお内儀。惣別夫婦の中にては此事人に語るまい。話すまい言ふまいとしめし合せた事が有る物。其事をちよと一筆うつらせ。此儀に付用有りと。地書いてやつたらびつくりし。色も香も捨て一散にとんで往ぬるは定の事。若其やうな心當ないかいなうと輕はづみ。切なき場所へ持ちこねとは。知らで女

房は何をがな。用事のうつりと思案して。床に直せし硯箱。取りにたてば桐の谷は。詞たとへ親子たりとも。密書を見ずとは古人の教。地心靜かに書かれよと遠ざかれば是は。御念の入つたお堅い事と。筆を浸してさら／＼と手早に書て封じめに。氏神しるす心の鏡。ゑびに結んで持つて立つ。詞ア、これ／＼そなたの文を其方がやつては。謀と覺るは定。姿を見てもがんづかれ。手段が知れるそもじはの。地供部屋へ行きかくれてゐて。往ぬる所を捕まへる。思案がよかる其文は。自が屈てやろと。ちよいと取る手もはやぶさの。鷹と雀でいやとも言はれず。そんなら私は隠れて居りましょ。直渡して下さんせと。頼木の下雨のもる。フシ下部が。部屋へと急ぎ行く。フシ奥はそれとも。しらいと。地人聲隠す合の手や。後先見廻し桐の谷は。文の封じめそつと外して押開き。よんで何をか悦びの。押戴き／＼。天を拜し地を拜し。もとの如くにとつくりと。フシ封じしまうて袖に入れ。地さあらぬ體に一間の口。し／＼と立より。詞ヤレ／＼お姫衆氣の利かぬ。奥の一間へお寢間しや。夜が更けるがといふ聲に。地三味の音やめて燈火の影にうつらふ姫君は。林平と手に手を取りて。フシ立出て給ひ。詞桐の谷寢間へ行まする。地何にも用は無いかと。念の入つたは一物の。あるをばけしてホ、／＼。詞なんの私が用がある。さりながら林平殿。お主と添寝に其大小。近頃無禮とがめられ。げに／＼御酒に食べゑひはつたりと失念。お預け申すと兩腰を。渡せば受取り側に直し。詞いやほんにもうし。最前お宿元から急用とて。文が參つたお届け申すと。地件の一通さし渡し。側によつて身構へを。するとも知らず林平は。定て戻るを待ちかねて人おこせしものならんと。封押切つて讀み下し。ハット驚く限付顔付。詞南無三寶一大事。地罷り歸ると駈出すを。立塞つて桐の谷。そり打かけて聲あららげ。詞ヤア大盗人のうつそりめ。誠姫君戀慕とは偽り。此所に押込られお在す仔細といつば。天子より預り給ひし千手觀音の御正體。寶藏に納め有りしに。何ものか盜取り在る所知れず。他所より入込し體もなく御内の者にきはまれども。詮議の手掛なき折に幸ひ今日の出代り日。達つて暇を請ふ者と我役でなき先の季定め。地倍の倍にて抱ようと。いへども聞ぬ

己が隙乞。其上最前返納の。金の蓄へ分に過ぎたり。何者ぞに頼れ盗み取つたる褒美にもらひし金と見付け。並大抵では言ふまじと。姫君に呑み込ませ。地酒に長じさせ色にこかし。とひ落さんと思ふ圖へ。持つて參つた女房の文。詞觀音の儀に付急用ありと。書いたは天命のがれぬ所。サア尋常に白狀せよと。地つめかけられて林平は。胸はどうづき氣は轉倒。女相手も身は丸腰。たゞ手を上げて暫くの暇を願ふ斗りなり。地流石慈悲ある姫君は。中に分入りそばに寄り。詞よもやそちが自に。難儀をかきよとて隠しはせまい。何者ぞに頼れのつ引ならぬ品故に。奪ひ取たと覺えたり。此御佛なき時は。自斗りか父上迄天子の咎。有りやうにいうてくれ。地身のせつなさにあられもない。心に思はぬ言の葉は。恥かしや悲しやと。スエテ歎きしづませ給ふにぞ。地流石の者も打しほれ。取つ置いつの胸の内。やがて桐の谷姫君引のけ。詞理知らぬ人非人何おつしやつてもお詞づひへ。地憂目を見せて白狀せんと。刀するりと抜きはなす。物蔭より女房がヤレこれ待つてと聲かけて。かけ来る間に胸打の。手は廻らねど林平が。引外して双向に掴み。切先己が脇腹へ。フシぐつと突込みどうと伏す。地ノウ悲しやと取縛る。女房よりは姫君桐の谷。詮議の種を殺してはと。あせるを手負ひは聲を上げ。詞やれうろたへまい人々。白狀致さん近うくと呼集め。ホフ、さすが八郎殿の御内方。推量の通り觀世音の尊像は。某が奪ひ取たり。扱こそ。仔細申すも恥かしながらも某は武士にあらず。膏藥賣萬能屋勘六と申せし者。女房は更科とて王子の妃。ある夜の忍び合を岩根御前に見付られ。地危きを遁れし恩の上。呼出されてお家の奉公。御臺のおかげと思ふ折ふし。詞密に招れ。中將姫が預りし觀世音の尊像。盗出してくれよとある。地道ならねども恩返しと。寶藏へ忍び奪ひ取り。詞女房に持たせ元興寺の客僧。玄昉方へ渡し申した。ヒヤア。其夜はわざと屋敷を出ず。詮議有りともいひ抜けんと。おぞい企も鼻の先。地褒美の金を貰ひしより。又此上に何事をか。頼れん内知れぬ内。出代りせんと迷足の。早き瀬にうつ魚の網。目に立てられて情なや。此世の隙迄フシもらひしぞや。地自業自滅の罪のがれず。せめて更科我に代り。詞彼尊像を取かへし。姫君へ戻してくれ。地それが未

來へ手向ぞと。いふが命の離れ際はなうしばしと留るかひ。なき世なりけり年月を。別れて暮し今日よりは。共にと思ふ樂みも。仇になつたか悲しやと。あへなき死骸に抱き付き聲を。フシばかりに泣しづむ。地共に不便と中將姫。桐の谷も心は涙。拂ひ隠してコレ／＼泣いてゐる所てなし。詞今日限に言譯た／＼ねば。姫君は禁牢との仰せ。此旨父御へ申上げ。御難を救ふが未來へ手向け。證據に立とは思はぬかと氣を付けられてげに尤も。夫が敵は頼んだ人。岩根御前が相手ぞと。伴ひつれて駆出すを。ナウ待つてたも二人の衆。詞我身の罪を遁れんとて。母様の惡事のだんだん。言はして自ら生きてゐようか。地假令如何なる責にあふとも。言ふ氣てなしそなた衆も顔へも出してたもんな。母様のお身の難救ふと思へばわしや嬉しい。恨みる者は身の因果と。噎び絶え入り絡ふぞ。其孝行はお前をば。憎み給ふは何事と。右や左に取纏りわつと斗りに。泣沈む。物の哀れを武士は。知らぬか隨人泰の安彦。父豐成の使として庭上に畏り。詞今日限に言ひ譯立たずは。姫君引立て來れよとの御上意。御預りの桐の谷殿お渡しあれと立上る。地兼て覺悟も今更に。歎き沈めど姫君は。遁れぬ道と涙を拂ひ。ア、迷うたり人々よ。堀に埋れし蓮葉も種清ければ。終には開く。必ず歎く事なかれ。たとへ呵責の責にあふとも。罪有る人の名を出さば。我が命なきと知ればや連れ行けと打しはれ。立別れ給ふにぞ。お袖に纏つて桐の谷。詞其お心なら何事も。口を閉ぢて申すまい。其代りには必ずとも短慮なお心持給ふな。何にも言うてたもんなやと。地互にかため更科が。追付尊像取返し。御手に入ると約束の。詞がせめて力草。憂忘草。フシ忍草。いつ迄ぐさともぎ放す。麻につれたる蓬生や荒れたる。軒の根なし草引立て。られて 三葉出る日や。フシ光も薄き。雪の空。庭の木枝も白妙の。六ツの花笠かつき合ひ。水は氷と張詰めて。フシ日のめもさ／＼ぬ座敷牢。地押こめられし中將姫。稱讚讃誦の聲だにも。ステテ次第に。弱り玉の緒も消ゆる。フシ斗りぞ痛しき。地宿直がてらの番人は。お末女中のはしたなき。氣なし苦なしが火鉢に集り。詞何と思やる皆の衆。雪降には間男の。洗濯するといふのに。此寒い冷いは。どうした事であろぞいのと。地言へばこまきがこましや

くれ。詞ハテ知れた事。今年は七月に閏。それでどうでもつもりが違ふ。思ひの外に冷るはいの。ムウそんなら。閏年には冷える物かや。ハアア道理てこそ。此お家の閏御臺様。其心の冷たさ。お姫様を此座敷牢に押こめ置き。人の前では霰のやうな涙をこぼし。陰へ廻つてはひねりかき餅。ひと割れる様な目に合はずや。地ひつちぎりの相伴を。食はぬ様にしたがいと。さがなき口のかげ言も。我身の事とはしらはり。フシすま。押明て岩根御前。誰ぞゐるか。と出給へば。そりやこそ閏御臺様あなかしこりよと。フシ口ふさぐ。詞なんぢや女の口から穴かし。こりや又大口話か。慙ない事の。必ずお姫に其様な。さもし詞教へてくれな。當分はこらしめに。糺明はさすれども有様はかはい。今朝からなんぞおましたか。地機嫌はよいかと問ふも人前。心をかしく。姫共。詞イヤ此間はお心持悪いとて。不食なされてござります。それにそちらは構ぬか。何故好物を拵へていやといやろとおまさぬぞ。勝手へ行て料理人に言ひ付け。ふくとの丸漬がある。賜持をたいておませと云へ。いけくくと。地残らず追やり。立切る櫓のかげに立寄り。詞お姫あやるか。大事ないわしぢや。地明けますと。オクリ閉まりし一間押明くれば地痛はしや中將姫。芙蓉の顔おもやせて。後の世頼む御法の聲。ステ色香もすたり在します。詞ハテ又氣のつまる佛頼み。幸ひ父御もお留守。小庭に雪が積つて。冷さがどうも言へぬ。此處へ出て氣をはらし。身を冷したがよいはいのと。地懶しき様でつれなきを。背かば如何と姫君は。一間を出て小庭を見渡し。詞母様のお蔭にて。今日は日の目を拜みます。見れば寒紅梅も咲きたれども。雪に閉ぢられて盛を見せず。其閉ぢたる雪も。咲きたる花も。散り消え失せるは目の當り。世の中の有様程。果ないものはござりませぬなう。イヤそんな事は知りませぬ。月雪花といへども。素て見ては面白うない物。ヤほんに聞けば。此間は不食しやるげな。何がなおましたう思ひ。手づから拵へた物が有るが。機嫌よう。こし召して下さるか。地何時に變りしやさかたに。姫君は手をつかへ。詞有難や冥加なや。佛の毒蛇に身を與へ給ふお慈悲。地何しに否と申しましょと仰せあればヲ、いやなう。詞さまでのものでもござらぬが。進ぜる物は

是。地これをとずつと突出す氷の刃。ハット思はず飛のく姫君。母様それを私にとは。どういふ事のお心ぞとフシ聲打頼ひ問ひ給ふ。詞ホヲ、無理におまそと思へば。ぐつと喉へ押込むけれど。まあ後生氣で無意氣にせぬ。何によらず自が。問ふ事が有るありやうに言へよ。隠すと是ぢやと地今度は逆手。ア、くく。まをしお前に私が何を包まう。其様になされずとも。お問ひなされて下されと涙に。フシくれて宜へば。詞ヲ切なかゆるめてやらう。逃げなよ。コリヤ。あの若黨の袖岡林平は。何故に切腹した。定めて八郎が女房と牒し合して。何ぞ言はして聞いたであらうがな。林平めも血迷うて。ぬかしたてであるそれ言へと。地疵持つ足の裏間に。はつと思へど姫君は。言うては大事としらじらしく。いへへなんにも申しは致しませぬ。もとより尋るわけもなしと。包み給へば又つゝかけ。詞ヤアさう抜かす程なほ氣遣ひ。然らば何故林平は切腹したぞ。其わけ聞かう。地なんと。くくと責められスエテ當惑の。胸押しづめ。詞御尤もの御不審。今は何をか隠し申さん。林平には自が無體な不義を申しかけ。聞入れぬを桐の谷が。外へ漏さばお爲にならずと。無理に押へ詰腹切らせ。地狂氣に取なし侍ふとフシ誠し。やかに宣ふにぞ。地流石の繼母も胸やすまり。詞ホ、まあ。それで安堵した。いつでも連合。豐成公が詮議あらば其通り必ず言へよ。外の事口叩くと。かげへ廻つて又是ぢやと。地威す手強さ氣の強さ。フシせん方も。なき折からに。地隨身安彦馳來り。詞仰せ付られし竹垣の牢出來。四方ひつそぎ八寸釘用意よく候と。地聞いて御臺は打うなづき。詞コレ姫。あの暗い所にゐよりは日の目もさす結構な。座敷が出来たおぢや行こと。地引立る氣は夜叉魔王。變化に取られし心地にて。オクリ泣くくへ引かれ入給ふ。フシとは知らずして。入り來るは。地左京之進晴時が妻と呼ばれて憎からず。娘と言はれ氣の毒の。田舎育ちの。フシおこなを引連れ。地通る後よりまうし。浮舟さんと。呼かけ出るは八郎が妻。詞梧桐の谷様かいの。おなつかしやの挨拶に。此方も近寄りなれくしく。詞まあ御息もじでお目出度や。見れば美しい娘御を通れられたがありやどなたでござります。サレバ此子はお前のお通合も知つての通り。夫晴時が田舎より貰ひ歸られし娘。是

はしたり。ハテよい御器量。お名は何と申しますと。地間へばおこなは詞も鄙ひれ。詞私は國では。こなと言ひ居つたれど。今のかゝ様が名を替へをつて。千壽と申しますてや。テモあぢなおものの言ひやう。アリヤお國の詞かえ。サア氣の毒なは。どうし居つてと。てやとには。ほつと愛想が盡きましたてや。アレ私も申ましたホ、くく。つい移つて。イヤもうし。うつる序に此家へうつり。押込られ給ふ中將姫様。尤も科は重けれども。禁牢同然の御糺明。あまりお痛はしう存じ。地此子が御目見えを幸ひに。岩根御前様迄お詫申しに参りしが。詞見れば御番の女中も見えず。やつぱり一間にござるかいなあ。イヤもうし。最前お出入の本頭が申すには。姫君入るゝ本牢拵へるとの噂。早それへお入れなされた物でござりましょと。地話す内にも目に溜る涙を。フシ互に押へしが。地やゝ有つて桐の谷。詞私もお詫の心で参つたれども。何時ぞやから岩根御前様の御機嫌を害ひ。式日のお禮も勤ず。生中に顔出して。おまへのお詫の邪魔になれば氣の毒。マア差控へて居りましょかいなあ。如何様そこも有り。いつそ阿呆な私とは昆布に山椒でて合もよし。申し出して首尾がよか。地お知らせを申しましょ。さう遊ばしてと頼み頼まれ。互に後程々々と辭儀に餘りて立別れ。浮舟は奥の間へ。取次頼みに行く内に。桐の谷は勝手口。入らんとすれば姫立ち出て。詞まうしコレお姫様より密かにお文と。地渡せば受取り何氣なくあたりを。フシながめ入りにける。地知らせと共に岩根御前入目は綿の打見よく。詞是はく晴時の内儀。連れた娘が話の養子。地どれくあほうサア此處へと。愛くろしきに取あへず。御意の通と式禮し。詞コリヤ千壽。あなたが此お家の御臺様。手をついてお目見え申しやと。地教へに隨ひ詞ににべなく。詞叔はお前がおかみ様でござんすか。かゝ様がお目見えをさす程に。お屋敷迄歩行と言はんとした故。何ぢやれ土産もなう。地來をりましてござんすと言ふもをかく岩根御前。詞テモ面白い物の言ひやう。イヤ正直さうな好いた娘。いつそわしに賜らぬか。手廻りて遣ひたいと。地仰せは幸ひ機嫌とりと。手を取つて側へ押やり。詞何が扱手前より望む所。その代りには。ちとお願ひお頼み申す筋有りと。地言ひ出す顔色早くも悟り。詞マ

願ひといふはお姫の詫か。地成程左様といふよりもステ俄に。しほるゝ人目追従。詞ム、やさしいようこそく。
連合豊成公お歸りあらば。其方を力にお詫び申さう。アノおまへがかへ。おいのう。たつた一人のかんぞ千が。難儀
にあふを親の身で。託言せず置かれうか。おりや氣強うはござらぬと。恨涙に目をこすり泣いて。見せれば此方もなづ
み。詞テモ扱もく。其様なお心とは知らいて。人が申せばともく。陰言申し勿體なや。地とは言ひながら姫
君を。一間に置くさへ痛はしきに。詞何故本牢へはお入れなされた。あのいやる事わいなう。一間に置く。人目威
しの刃物三昧。最前にもコレ此合口を逆手に持つてわしへの刃向ひ。ヲこはい事でござつた。そりや何故にえ。其
罰の事が有るてや。八郎が女房が媒にて。若黨の林平と密通し。姫頭に見付られ。相手有つてはやかましと。桐
の谷が手にかけ林平を殺したげな。ヒヤア。其事を自に。知つたか知らぬかありやうに言へ。言はぬと。喉へ突込む。
てて。ヲ、恐ろしい事いの。どうて是は本氣では有るまい。若しや怪我でもさしては。悲しい上の悲しみと思ひ。つ
い竹の牢を拵へ。入れさして置きました。何のわしに如才があるぞと。地有る事無い事打つて變へ。咄せば浮舟せき
立つて。勝手に向ひ聲あらゝげ。詞桐の谷の人でなし。御意見すべき其身にて。媒は何事ぞ。それ斗りでも姫君は。牢
舎は扱おき流し者。地不忠不義なる女めと。ヲシ聞えがしの怒り聲。詞もうよいはいのと。地御臺の猫なで。言へば
よいかと娘の千壽。詞さつきにも女中がな。お姫様から密かにと。文渡したを桐の谷様。たばして勝手へ行かんとし
たと。地言ふも追従育ちのいやしさ。扱は外にも不義有つて。媒すると覺えたり。其文證據に一詮義と。座敷を蹴
立る折もをり。大臣のお歸り知らすにぞ。はつと是非なくしづまりて。ヲシ御臺と。共に出迎ふ。地御主横萩の右大臣
豊成公座上に御足を留め給ひ。詞晴時が女房浮舟よな。定て中將姫が災難聞及ばん。天子より預り奉りし尊像を失ひ。
毎日々々藤原の鷹飼をもつての御催促。是非に及ばず今日は姫に密談し。心がかりな者あらば。差圖にまかせ引捕へ
くゝり上。拷問して言はせんと胸を据ゑて歸りし。どこへとばしり懸るも知れず。汝も一間へはや來れ。地御臺も與

へと言ひ捨に。フシ何いふ間なく入り給へば。地岩根御前は氣味悪く。浮舟は御跡したひ。行かんとするを押とどめ。詞アノ御機嫌へ言ひ出しては却つて姫の爲にならぬ。地首尾見合して自が。詫言ひ出さう其時にと。無理に押へる心根の有るとも知らずさあらば。お前に任すよい様にと。鬼を頼んで猶地獄。餓鬼めが何かしやべらんと。先も氣遣ひ繼母は。オクリ一間をいさして走り行く。フシ後うちながめ。浮舟は暫し佇みゐる所へ。勝手口より桐の谷立ち出て。どうぢや〜お首尾はと。問へど俄に顔をむけ。娘に問へどしゝらしん。辛氣な顔ぢやが浮舟さん。詞又繼母が邪魔したか。地我君様も鼻毛をのぼし。お聞入れないかえと。言へども猶も見向もせず。詞勿體ないあの。佛の様な御臺様を繼母よばはり。人でなしに用はなし。地面恥かこより足ばやに。とつとゝ往んだらよからうと。胸に餘りし當ことを。聞ぬ氣な桐の谷。むつと顔にてずつと差寄り。詞そりや誰へおつしやるぞ。此方が問ふのは姫君の。地お詫の筋と言はせも立ず。詞其お詫叶ひませぬたとへ此度の越度ないとして。姫君には不義の惡名。地淡島へても流しやり。腰より下の病の養生。此方に直して貰はにやならぬ。詞ホ、〜〜こりやをかしい。扱は繼母と一つになり。無賃で科を重うするのか。姫君に不義有るとは。地何を目的何を證據。過言であらう浮舟殿。詞イヤ過言でない證據が有る。ムウ面白い。證據があらばそれ見よう。ヲ見せう。サア出した。イヤ此處はお上のお耳へ近し。向ふのお庭へたつてもらはう。必ず行たら見るぞや。地見せる。コハリぞやと。詞詰め合ひ兩方が。立つも一度に目を離さず。尻目鋭く西東別れて。おりる縁先は花と。花との。コハリ櫻鯛。下駄の鼻緒の仕末よく。オクリはきしめつてこそ立。フシ向ふ。地娘は見なれず聞なれず。怖さ先だち氣はうる〜。先手を取つて桐の谷。詞さし圖に任せお庭へ出たが。見せる證據はどれどこに。まそつと向ふへ出てくだんせ。サアてたがどうでござんす。ハテまあ急かすとお下にござんせ。お下に居たがどうでござんす。どうとは最前姫君より。そもじの方へ參つた文。それが證據ぢやそれ出した。コレコレ粗相言ふまいぞ。お前が浮舟さんでないか。わしが桐の谷でなくば。聞ずてにもならうが。此お家の建物。暗時

様のお内儀。わしも八郎が女房。外の出合とは違ひ言ひ直しはならぬぞえ。今日に限り文の來た覚えはないぞ。ムウはてなあよい。是千壽。爰へおぢや。地あいと言へども身はわな。詞ハテ怖い事はない。おれがある。地おれが居るとフシ近く呼よせ。詞最前あのお方へ。姫君よりというて。文を渡したであらうがの。成程々々さうぢやげに。文渡したらあちらさんが取らんした。誰がいなう。おまへさんが。わしぢやと言はんすと事がむつかしうなるが。わしぢや有るまいがな。是よう顔見さんせ。わしぢや有るまいがのと。地睨み付けられなほがた。詞さう言はんすりや。お前さんでもない様にも有り。いや。お前さんぢや。お前さんも女子。わしも女子。どちらぞ男ぢやあるまいし。あんまりにらまはんすなと。地常物言はず言ふ時は。ごろはつさいの捨詞。フシ嵐に紛れたはひなし。地見兼て浮舟もうよい。あつちへ行きやと娘を追のけ。詞争はれまい桐の谷殿。姫君と林平との戀の媒。其上最前姥が届けた文。隠すは曲者お出しなされ。イヤない。ある。どこに。地爰に有るとさし込む懷。其手を押へ。見苦しいこりやどうするのぢやと身を固め。右をかくれば左りではね見せじ。見ようの争ひは。櫻の色と梅の香と。何れ劣らぬ柳ごし亂れ合ひてぞ。地後は互に雪かけ合ひ弱身は見せぬ。フシ折からに。地藤原の廣嗣卿御入なりと知らせにつれ。奥よりかけ出る岩根御前。詞かくと見るより家來を呼んで引分けさせ。詞様子は始終聞いてゐた。憎き女は桐の谷め。有無を言はせず引立て門前よりぼつばらへ。地浮舟親子は我部屋へと。驗を見せたる依怙蟲負おのれ。待てよを目顔に含み。引立てられて兩人はフシ是非なく左右へ別れ行く。地程なく入くる大貳廣嗣。王子御臺の人くひ相くち。上座に通ひて。詞これは。岩根御前。此間は御參内なき故。お上にも殊の外お待かね。罷歸の節御同道申さん。扱かの觀音の儀。其元の願ひによつて毎日々々變らぬ催促。姫はなんと致したと。地問ふに御臺は小聲になり。詞サア其越度をもつて。中將姫を亡き者にせんと思ひ。王子様へお願ひを申し御催促は受けながら。もしや盗み取らした事。林平めが白狀したかと。姫をせこめて問へども言はず。最前通合豐成の詞のはし。かんづい

たやうで小氣味が悪い。地言はさぬやうの。仕様はないかと膝を寄すれば。調大事ないく。いつそ姫を殺して仕舞はうイヤ。殺しては。夫豐成がたゞは置くまい。サア其殺様有り。此大雪こそ幸ひ。割れ竹の罪に合せ。身内に疵つけ雪中に捨おかば。寒邪入つて死ぬる定。さもなくとも性根みだれ。誠の事は得言ふまじ。地引出し召されと言ふに隨ひ。實によい仕様と下部を呼出し。調汝等てんでに。割竹持つて姫を引立來れ。地用捨せば曲事と。言ひ付けられて是非なくも。はつと答へて引出すよその。見る目も三重。説經あらいた。はしの中將姫。七日七夜は泣明し。あくる八日の朝の雪。ギンわれを責苦の種となり。身も冷え。かへる其上に。素足に雪の氷道。劍を踏むが如くにてよめば。フシ行けと打たゝく。梢の雪が一つもり。背に打かゝればどうと伏し。起きれば叩く割竹に。手足もしびれ。身も縮み命も息も絶えゝにて。許させ給へ母様と聲も。フシ惜しまず泣き給ふ。調廣嗣遙かに見下し。ヤア中將姫觀世音の尊像は何方へやりけるぞ。眞直に白狀せよ。いつはると此上に骨を擲いて責め詞む。地雪水を飲まぬ内早く。フシ早くといじり問ふ。サイモン姫君。涙と諸共に。ギンおろかの仰せ。さむらふや。自斗りか。父上迄が。答に逢はせ給ふ事。地何處へ隠し置くべきぞ。調遠からぬ内尋ね出し。地お戻し申さんそれ迄の。責苦を許し給へやと涙と。フシ共に宣へば。詞ハテ手のびなる言譯かな。尋ね出す覺えあらばある所知つたに極つたり。それ上着をひつばぎ雪にうづもらせ。ぶち据ゑて言はせよ。手ぬるし手くしと下知すれば。地かしこまつて侍共。情なくも上着を剣ぎとり。てんでに割竹ふりまはし。たゞき立てれば姫君はやれ。心なの下部やな。昨日迄も今朝迄も。ギンいたはり傳く身なりしに。今日は修羅の鬼となり。我を責むるか淺ましやと。大地にどうど打伏してフシ消え入るばかりに見え給ふ。地次第に雪は降積り。打つ割竹で身内は切れ。肩背に積る雪水が。五體に流れ浸み渡り。五臟六腑が。どきに凍える辛さは斷末魔。彼處に倒れ此處に伏し。許して給べ人々なう。死ぬる末期に一ぺんの。御經讀誦はさしてくれ。これなうく手合せ。かこち給へば心なき。下部も割竹。投げ捨て。オクリ袂をひしぼる斗りなり。フシ雪

もおだやむ。折からに。追拂はれし八郎が。妻の桐の谷逸散に駈來り。入らんとすれば枝折戸しめたり。打破るも易けれども。狼藉者と言はれては。お助け申す妨と。小柴垣より延上り。詞まをし／＼お姫様。何時迄科を御身に被り。責苦には會ひ給ふぞ。地失せたる筋の段々を。なぜ言開きをなされぬぞ。但しはわたしが申さうか。道だてもあんまりと。ステアあせり。歎くは中將姫。詞ヤレ未練な事を言ふ人。最前文でも言ふ通り。如何なる責にあはうとも言はぬがわしへの忠義ぞと。くれ／＼書いたを見やらぬか。そなたの詞を聞入れて。つれない命つないてゐるも。一度父上のお顔が拜みたさ。もしや此場でせめ殺され。地骸を雪に埋むとも。天より受た。罪と思へば。フシ誰も恨むる事もない。地いやる氣ならば今死ぬる。必ず言うて給もんなど。仰せに桐の谷泣く／＼も。詞お前を助けうばつかりに。言はうとこそも申せ。お果てなされて何の無駄事。さぞお寒うもあらうし。冷うて。身内が。千切れるやうにござりませうなう。推量してたも。西風の吹く時は。彌陀の御國の迎ひと思ひ。北しぶきにあふ時は。肌を劍をあてた心。撃つ薊竹が身に通る。地血走る疵へ雪水の。流れ慕ふ其時は。片刃の鎌で背筋をば。立ち切らるゝもかくあらん。詞我苦しみを見やらうなら。答へられまいと言ひたかる。地早うそなたは往んでたも。あれ又雪が降つて来る。木蔭が欲しや笠ほしやと迷ひ給ふにぞ。桐の谷も何をがな。雪防ぎにと思へども。ステア手許にあらねば氣をあせり。笠のかはりと脱ぐ上着。我身も肌は衣ひとへ。お主の爲にする艱難。なんのと思へど身はわぢ／＼。齒の根合はねば思ひやり。脱ぎたる衣を投入て。詞やれそれ召せよそれそにと。地教へる内もフシ胴ぶるひ。地姫は悲しさ遣るかたも。涙と共にきぬ取上げ。物をも言はずしや。くり上げ。押戴かせ給ふにぞ。答へかねて桐の谷はわつと。フシ斗りに泣き沈む。地此方に見てゐる岩根御前。方人ある程なほ逆立ち。小庭に駈おり薊竹押取り。詞見れば下郎共が責めやう。あんまり酷うて力みが立たぬ。地打ちやう知らずは教へてやろと。いきほひこんでふり上る。のう情なや。母上様。討たるゝ杖はいといはねども。繼子憎みと世の人の。思ふ手前もはづかしい。他の手にかけうちなりと。

殺しなりとも存分みんぶんに。お心やすめ給はれと、フシ涙と。共に宣へば。詞ことばヤア小賢こけんしき詞やな。常不便ふびんがる自が。せめたといへば聞えもよし。酷むじうは打たぬ受けて見よと。地ちたぶさ髪かみひとつかみ。ついでに雪水ゆきづのまさんと。引まはすを見るよりも。桐の谷やがて枝折戸えがしけ破り。もつ手をもいで打かける。竹の腕うで先さきしつかと取り。ぐつと一ねぢねぢ上げしは心地よかりし、フシ風情ふうせいなり。地さすがの繼母けいぼも息はづみ。詞コリヤ主に手て向むかひか。地慮外者ちりょがいしやめと威せど聞かず。詞へエ、胸むね怒おこなお人ぢやなう。いふ事もあれど。姫君が死なうとあるが悲しさになんにもいはぬ。地其代かひしろにちと痛いめは遊ばせと。なほねぢ上ればあいにく。詞家けいけ來き共見てをるか。地いへども下部もよい氣味きみ顔。フシそりく、と逃げてゆく。地廣嗣くわく見るより聲をあげ。詞誰かあるあの女。引ずりのけとのゝしれば。地畏おそつて駈かくる浮舟。桐の谷を取つてつきのけ。詞ヤアそもじが姫君の肩持かみもちてば。こつちも御臺みだの肩をもつ。地最前の意趣いしゆばらしせめの役は自と。割竹取れば繼母けいぼはふた。詞でかしにく。地そちにまかすといひ捨すに。フシ座敷へこそはにげ上る。地桐の谷も竹ひつさげ。よい所へよう來たなあ。まつてゐたと打かくる。地てうど受けとめ浮舟が。つけて廻つて一はねはね。又打かゝるをひつばづし。はつと討つて打落とし。掴つかみかゝるゝをめつた打ち。是なう待つてと姫君の。取付き給ふも用捨いにてなく痛手いたでと知らずうつつ竹が。急所きよじよかあへなやうんと一聲。打伏し給ふにびつくりし。廣嗣繼母くわくけいぼも是はと顛倒てんたう。桐の谷見るよりすがり付き。コレお姫様是なうと。呼べど叫べど甲斐かいなき有様。浮舟は狂氣きやうきの如く。詞是はお袋様廣嗣様。いきが絶えたがどうせうぞと。地うろたへ騒さわげば共にうろたへ。詞豐成公へ知れぬ内。拙者はお暇いひま。いや自も宿には居ぬふり知らぬふり。殺したは浮舟。地後日に必ず爭ふなど。言ひ罵りて兩人共。王子の館へ。フシ走り行く。地桐の谷おき立ちお主の敵。浮舟やらぬと駈かけ寄るを。詞ヤレもうよいぞそれには及ばね。そもじとわしとが仲悪なかつふ。して見せたので一杯参つた。サアお姫さま是からが。地お命のばはるめてたき門出かどで。氣をはつきりと持ち給へ。ひばり山迄立のくと。抱き起すれば肩かたに縋すがり。詞ぜひ叶はずば死したふりと。教おしへの通りにしましたが後あと。で知れてもだ

しないかや。ハテお氣弱い事ばかり。地人の來ぬ内いさくと。フシいたはり出づる後より。待てよ暫しと父の御聲。ハツト二人が立掩ひ。隠す間もなく豐成公。打しをれ立出て給ひ。詞姫は最期を遂げたとや。せめて死骸へ一言の言譯したさにとどめしぞよ。繼母岩根がつれなきも。今日の責苦も知つてはあれども。大炊の君を迎へ奉り。先帝御一所に恙なきも。我慢な御臺を頼み。王子へひたすら詫せし故。今かれめが邪慳を邪慳とあらはさば。讒を構へて。御二方を洗罪さするは治定。地そこを思うて是非なくも。一人の娘をゑばにかひ。殺さば殺せ死なば死ねと。よそに見なする我心。詞推量してくれ浮舟桐の谷。親ぢやもの子ぢやもの。心の内の悲しさは。地舟車にもフシ積まれうか。地天子の爲親のため。よう艱難をしてくれた。二人の者頼むぞよ。ひばり山へ死骸を連れ行き。よきに葬り隠してくれ。地せめては野邊の見送り。涙と共に立ち給へば。浮船桐の谷泣き沈み。姫はなほしも物かげより。伏し拜み。父の御恩のありがたさ。別れにま一度お顔を。かけ出給ふを二人の女。押しめ押隠し。かくせばさがが豐成ものびあがり。詞進退芭蕉の葉のごとし。必ず風に破られな。地時人をまたざれば。何かさきだち何か残らん。詞逢ふが別れぞ。地さらばさらばと。ステなげきに沈む御姿。見るにかなしさいやまさり。西方彌陀の御國にて。まち奉る父上様。詞イヤなうそれはおれがさき。地いや目かと死を急ぐ。娑婆即寂光爰冥土と。諫むる人も後や先いづれ。のがれずのがれても。後はきえゆく雪道や。胸はこほりと鳴川の。御館を離鷗山いばらの。里へと急ぎゆく

第 四 道行六の花あしだ

散花と。散つても。消え残る。雪に。あしだの。道も見ず。まよふ山路に。酩や辛やと。貪慾と。思ひくらせしその悲しさを今ぞ。かたらん涙。がは。シテ林清いたはしやな中將姫。さがなき母のいばらがき。隔てしなかの。責苦にも。

父の仰せを　ナホスフシをむかじと。二人あぢきなき世をながらへて。行末なにと鳴川の館はるかに宇陀山へ。身をば捨られ雪の道　オクリ乳母。の桐の谷浮舟が肩背にかゝりたどくと。歩　オクリみぐるしきうき　フシ旅路。フシ幾山村は。とけしなく　オクリ涙の。つらゝ佐保川に水たえやらぬ古川の。いそのかみてに賤の女が。布を晒せば。氷解け流れまつはれ。フシひらめきて。鯉と見るは所から　長地神代のためし我々も年経てこゝに石の上布留の社と諸共に。日の目拜めばもくの尾の瀧に水音。とくくと。生駒おろしにあきしのや。外山の霞。ふきわけて。二上が嶽を見上ぐれば。木々の梢はあをくと空にしられぬ雨霽。かゝる辛さのしのぶ身は。袖をかざしの笠間山はれ入る雲のあとを追ひ。かしこきかりと打つれて。北を後に山の邊を。越えて宇陀野や峯白き。氷倉高倉山つゞき行けば。するどく母の名の。岩根險阻の伊賀見坂。一木のかげによるくと。ステテ疲れまろばせ給ひしを。フシはつと立ち寄り勞はれば。シテ姫君涙の。聲をあげ。なう嬉しいぞや二人の家。いつ怠りなくとやかくと。心苦勞にしてたもる。氣をやぶらじと母様に死せし姿と見せかけて。館はのがれ。フシいでたれども。林清かりにも親の目をかすめ。いづくにのがれ。あるべきぞ。詞このまゝこゝに捨ておいて。其方衆はもう往んでたも。ナホス地とてまながらへ住むかひの。なき身を早くこの野邊に。凍え死にしてたらちねの。お心やすめ。自らも冥土で生みの母様に。逢ふをせめての樂しきと。世を恨みたるかこち泣き　フシおもひ。やられていたはしき。ワキ地浮舟涙をおしとゞめ左様思すは父御へ御不孝。詞ひばり山へ御供と。申すは夫婦時が故郷にて岨陰に。住みあらしたる一家あり。地それに忍ばせまゐらせて更科が吉左右を。待せませんと二人が相談ところはるかに隔りてよもや繼しき憎みもあらじ。詞なう桐の谷さんさあゝお供。フシとすゝむれば。シテ地ヲそれさうぢやの答へも氣輕。いざさせ給へと手を取つて。二人君と我とがなか睦まじと。陰口のはを疑はれ。今日もあすかを越すまでの。きがねはもはや。フシうがちむら。フシ歎き給ふな歎かじと。いさめすかしてやうくと。タ、キなだめゆく身も目は涙。共なきつれの八咫鳥みちしるべさへしらゆき残る。　オクリやま

と。紀の路の境なるナホスひばり。山へと三更やつれゆく。

地人窮するときは偽り君臣父子の道を失ふ。横萩の右大臣豊成公。姫君病死し披露し何とぞ尊像取戻し。再び親子對面の。佛意を頼む初瀬寺。御臺も悪事さとられじと共に御寺に三七夜。籠り勝手な身の願ひ毘沙門天の鋒さきに。

フシ恐れぬ邪氣は是非なけれ。地忠義にはフシいづれ心を。晴時が。朋輩久米の八郎と毎日はりの宿直役。ひばり

山の隱家より時刻といそぎ長谷寺の。フシ門前遠く歩みくる。地折から内より娘の千壽。出合頭にハアと様。詞今

日はおまへのお役。爪上りな山道をいきせきとお出て。まづ地方丈へお入あり。ちと御休息なされませ。詞ヲ奇特に

よういうた。御臺様のお傍に召仕はるゝ程あつて。めつきりとおとなしく田舎詞も直り。たちふるまひもよくなつた

ぞ。シチお上には御兩所共御機嫌はよいか。其方は何しにこゝへ出たぞ。アイ今迄お傍にをりましたが。地お經の聲に

氣をとぢられ四方を見はらしに參りましたと。聞てうなづき。詞ホ、いまだ間のない御前勤め。氣もつまる管道理々々

と。地話なかばへ勅使と知らする王子の官人。晴時驚きコリヤ千壽。詞勅使の様子お上へ申せといひ遣はし。

地こゝ迄勅使のたつ事は又御佛の催促ならんと。フシ氣の毒の胸いためる所へ。地勅使は芹屋の時澄二位中將に經

上り。髭にあらはす意地悪づくりゆがみしつちに冠を着し。道一はいに歩み来る。かくと聞くより豊成公八郎召連れ

出迎ひ給へば。のつさゝと上座へ通り。疊ざはりもあら氣の勅説。詞謹んで聞かれよ。豊成公願ひによつて大炊の

君は勿論。先帝諸共其儘に差置かるゝ所。息女中將姫預りし尊像差上ぬのみならず。病死と偽り雲雀山麓に隠し置く

條轍聞に達し。天眼をくらまするは二心に極りたり。地いそぎ行向ひ返答悪しくば。大臣を引立來れよとの勅説。有

無の勅答あるべしとフシにがにが。しくも相述ぶる。地主の詞を待かね晴時進み出て。詞コハ心得ぬ御説。姫が最期

は眼前廣嗣卿も御存じ。何とぞ失ひし尊像を尋ね出し。申し開きを致さんと。主人豊成此毘沙門天に祈願をこめ。地三

七日夜通夜致すも上を恐れ。二心なき證據此旨宜敷おとりなしと。いはせも立てずヤア其言譯くらい。詞尊像を

失ひし誤りを知らば。姫を助け置くべきか。上をかすむる大罪二心なきとはいはれまじと。詞おどし付けたる詞を打消す久米の八郎。詞其御咎め却つて不審。まさしく姫は最期をとげ。死骸をひばり山へ葬りしは世に知る所フシ但し聞誤りてのお咎か近頃粗忽のお勅使と。地かさにかゝつていひ隠せど。みかうの冠打ふり／＼。ヤア盗人たけん／＼しいとはうぬらが事。詞中將姫が存生でゐる事は。身内からの訴へ。よしそれとも死んだらば死んだにもしてくれん。地いまだ死骸の損んずる日數もなし。塚を穿ち掘出し首討て持參せよ。死首なりとも實驗せん。フシなんと／＼とせり詰られ。地はつと二人が胸に釘。うつて代りし詞もなく。スエテ赤面したる有様に。地豊成公も賢慮を痛一生懸命。爰ぞと胸をきはめ給ひかに兩人。詞我恩愛の道にまよひ。姫をかばひ王子の疑ひかゝりなば。地先帝を始め大炊の君諸共たれか見そだて奉らん。不便に思へども顯れし上はぜひなし。姫にとくといひ聞せ最期を清くとげさせよ。焼野の雫子夜の鶴子を哀れまぬはなきものを。死んだが定なら屍をば掘穿てとはお勅使。そりやあんまりな御采配と。恨涙に聲くもり。袖かき合せ給ふにぞ。晴時八郎兩人もげに御道理と諸涙。佐野の渡に鳥あらば。フシ共に時をやつくるらん。地さすがの勅使も少しはしをれ。詞其御歎きはさる事なれども。預りし尊像紛失の上からは。申譯たちがたしコリヤ／＼兩人。最期の暇に暫しは用捨。首持參は入相限り。暮に及ぶと豊成公を代りの囚人。地格勤者四方を取まいたれば必ず時刻を延すなど。いひ付け立つて大臣にも。いざ方丈へと引連れて。はや傍放さぬ姫の人質。なんと内意の仰せもなく涙を。袖に押隠し。フシ伴ひ入らせ給ふにぞ。地二人は御跡ながめやり。ハツト計りに息をつめ。スエテしばし詞もなかりしが。地耐へかねしか久米の八郎。詞よい／＼是からやぶれかぶれ。地たとへ姫君お恨みありても。元興寺の玄昉方へはせ行き坊主引つとらへ。彼尊像を取戻し御難を救ふ迄の事と。いひ捨て立つを引とぐめ。詞やれまて八郎。都元興寺迄は行戻り十四五里。空をとんでも夜半は過る。暮限りに首討たねば。豊成公の御身にたゝる。ムウ然らば貴殿は姫君を。討奉る所存か。さういふそちは主君の難儀はかまはぬ氣かと。地互にきつ切刃を廻し合ひフシ論

に及ぶと見えけるが。地やがて晴時面を和らげ。詞これさ八郎。かう心底疑ひ合ひ。口論するは氣が替らいて忠義にならず。なんといつそ頭から。打とけ相談する氣はないか。虫ばやな貴殿故そこつに物がいひにくいと。地碎けてかかればなんのく。詞輕事には短氣も出ようが。かゝる大事は幾重にも。相談づくがこつちも勝手。地及ばずながら思案の底打あけうではあるまいかとほどけつ解けつもつれ寄添ひ。詞なんと晴時とても姫君は討れぬ。討ねばまた主君豐成公の御難儀。思ひ廻す程大事の場所。高うはいはれぬが。身代りはどうて有うぞいなう。サアおれもさうは思ひ付たれども。是迄に手をかへ品かへ様々の身代り。仕盡して仕様がな。どう思ひ廻しても身代りは古い。いやさうかた意地にもいはれぬ。古いをいはうならば。朝夕する膳部。此世始つての八木かし洗うてたき上げ。ぎやつと産れて乳ばなれより今日迄食すれども。命をつなぐ一粒萬倍。眞實しんの甘露の味ひ。幾度び食てもあはぬぞや。身代りも忠義の誠。其誠をもつて姫の身命を養はど。古くと一口は大事あるまい。殊に最前勅使の詞に。死首なりとも討つて來れというたは幸ひ。地土中に埋し故かくの通りと。女の首さへ見せたらば。あながち似た似ぬにもよるまじ。詞是はしよい身代りぢやがと。地氣を付けければ晴時横手を打つて奇妙々々。詞其勅使の詞に氣がつかなんだ。とはいへその身代りの人は誰であらう。地いづれか女の若人があらばと。思ひよらねば。コレサく。詞誰彼といはずとも。お身が田舎よりもらひ歸りし娘。器量もよし似せよつた者と。地差圖に。ハット胸ふさがり。イヤ詞あの者は。ナントいやあれはと。地子と名が付けば氣は轉倒。卑怯な辭退に及ぶのかと。せりつめられて忠義には。負けじと思ふ晴時が。五體を碎く思ひにてさしフシうつぶきてゐたりしが。地面目なや八郎。詞全く娘を惜むにあらず。地彼が父磯大夫船切手をくれる節。年ばも行かぬ孤兒御養育くだされよと。手を合せし其時を。思ひ出して未練の涙。詞産れ故郷の國をはなれ。親でない身を親にして。とゝ様のかゝ様のと。付纏へばおのづから。地他人の子とは思はれず。不便と義理とにからまれて。あつともいはず不返事は。許したもれとせき上ぐる。心を思ひ目をしばたゝき。詞其理尤もなれども。誰あらう中

將姫のお身代り。草の蔭なる磯大夫も何をか恨みん。地時刻移ればお爲にならず。忠義に代る義理あるまじ。但しは討たぬ心かと恥しめられて。詞ハテ討つまいといふにこそ。成程討たふ貴殿呼出しくれられよ。得心さすも不便なれば。どうぞだましてたゞ一討。地寢双合して待つてゐると。是非なき體の拔刀フシ涙と共に押かくす。地よい合點と八郎は。さしのぞく勝手口。あれか是かと見廻す内給仕の通ひに娘の千壽。見合す額は困果の招き。フシなんの御用と走りて。詞ホ、いや外の用でもなし。田舎生まれば草木の名をよく知つたと聞きしゆゑ。幸尋ねる一木あり。アレ〜。あの向ふな大木は。なんといふ木ぢや知つてゐるか。地問へば千壽はムウあれかえ。詞あれは桐の木。ヲ、成程桐の木。地これさ晴時。それそこを桐の木。地合點かと知らせば是非なく走り寄り。ふり上げる劍の光。千壽ははつと振返れば。フシちやつと隠してさあらぬ體。詞フウと〜様。今の光はなんぢやえと。地問へばよそのめの咳ばらひ。八郎出合にハア珍らしい稲光。はや夏の季に入つたかと。いひまぎらしてこれお娘。詞こちらな寺の塀越しに。咲いた紅梅掬見事。そなたはほしうは思はぬかと。地たらしかゝればアイ。一枝切つてもらうたら。御臺様へ上げますと。詞をすぐにヲ、切つてやりたい。詞つい切つて。地きつて。フシきつてと目顔であせれば一思ひと。走りかゝりし父がぬき身。見るより娘はヲこは。ゆるしてたべとにげ迷ふ。やらじと捕へる八郎が袖にかくれる心根を。思へばほんの窮鳥。父は猶しも不便の氣おくれ是非なき折の人音は。誰やら來るぞと見やる向へ御臺の惡者。そりや覺られなと兩人は。千壽を袖に押隠し。とぼけた顔で姫君を。討つ相談のフシ身拵へ。地歩み出くる繼母はしを〜。拵へ涙にむせびながら。詞なう〜晴時八郎。今奥で聞きました。姫がながらへるやるといふ事。お耳に立つてうてとの勅諭。なさけない其方衆が。承つてどうするぞと。地恨むる體の裏問ひを。それと悟つて兩人勅命といひ主君豊成公のため。小を殺し大を助くる思案。只今姫の御首討にまゐらんと。相談一決致せしと。地いふに猶しもいや〜。詞主の娘討れはせまい。よう分別をして見やと。地押返したは人目の辭儀心で笑へどおもしはしをれ。詞常御大切に

なさるゝ御前様。地さぞや悲しう思召さんとの。のぼし立つればナウ心づよい兩人共。詞姫を助くる氣はないか。イヤ最早存じもよらず。追付お首をお目にかけう。しかとな。なか／＼。地へエ、胴慾な者共といひつゝ後へ寄るかと見えしが。袖に隠せし千壽をもぎ取り。引立てかたへに立のくを。詞ヤレ是娘は用事ありと。地すがる二人をはつたとねめつけ。詞中將姫を必ず討てよ。檢視に自ら追つけ行くぞ。アやくまい世話をやかするなあと。地あてに思うた身代りの。種ひつかゝへ一さんにフシ奥をさしてぞ入りにける。地跡に二人はあんごりと。もがれし蟹の手も足もしびれる計り立すぐみ。詞はなくて諸フシ共に差俯向きつ手を組みつ。外に仕様の一思案。胸は裂けても姫君を。助くる筋も時移る屠所の歩みか未の刻なり。オクリ出す。かねは耳にどうづき。晴時ハツト顔ふり上げ。詞八郎今鳴る鐘は。アリヤ何時。九ツ過ぎて八ツの上刻。暮方迄は。二時。助くる思案は宿での事。急げよ。行けよ。地まつかせと飛ぶが如くに。三重へかけりゆく。フシ雲井はるかに。羽をのして。古巢に歸る雁金も。本フシ宇田山。里に。足とめず。それもことわり中將姫。故郷の空は封じられ。スエテ瘦せ衰へてひばり山。麓に假の板庇し。大和葺にて雨を聞き。長地野山の花で春を知り梅にきて啼く鶯。て月星日かずくる數珠は。むじやう菩提の御願ひ。彌陀三尊への手向ぐさ。折りつみとらんと底前の。籬がもとにフシ出給ふ。地浮舟桐の谷いひ合せ小姫に琴箱もたせ。目通りにさし出しゑくばに愛持つ浮船。きげん見合せ。もうしお姫様。詞今日はちとお願ひあり。昔々吉野の奥にて。天武天皇様が面白う琴あそばし。天女が天降りし。それより御運をお開きあつたと申せば。地一曲あそばさるゝも吉左右。我々も樂みたし。詞桐の谷さん。それはなあ。地唐土では秦の始皇。琴の音に危き難をのがれ給ふ。詞馬に乗つて琴ひいた女中もあり。地憂へをはらふ玉帶。つかかさがして置なされ。あんまりめいつたお顔もち。歌ちればぞ花の色も香も。詞なんぞと歌うてもらひたい。お姫衆どうぢやいなうと。地はてに出かける言の葉も。無常をけさん下心。フシおもしろさうにいひかける。地心を汲みて姫君は。詞ハテ望みとあればいやともいはれずさりながら。父豊成公には。

長谷の毘沙もん堂へお籠りなされ。晴時八郎兩人が毎日の出仕。ぜひ一人は戻られ便りを聞くが。地けふは何故おそいぞや。氣づかはしやとありければ。調浮舟引取り。今日は夫晴時詰番にて。八郎様が休日定つて戻りのついでに。地血原朝倉大藏寺の。梅見女中にさそはれ。お出あつたてござりましよ。油斷して桐の谷さん。主ある花を折られまいぞ。調なんのいな。こちらの夫は其やうな。よその花見るおんちやごんせぬ。晴時さまこそよそく。に。むまいさかりがあるぞえと。地氣をもたせ合ふ色もたせ。なんといつそ姫君にも。野がけとおでかけなされぬか。調よかろぞえく。此長閑な春景色。あつたら事ぢやがナアまうしと。地陽氣な事のありたけを。すゝめ立てたる兩人が。フシ心に花は咲かざりし。地姫君猶もにこやかに。調ヲ、何によらず。二人の衆のいやる事は背くまい。琴ひけならひかうし。花見にゆけなら行きましよと。地共に勇みて見せ給へば。そりやこそお氣が浮いてきた。お姥衆お部屋へお供し。琴おひき遊ばすうち。手ばしかう花見の用意。人目があればお乗物。供の女中は旅姿。御所風やめて町風に。笠は阿彌陀がおすきぢやぞ。繼母からげにからげなと。行かぬ先からざはついて。すゝめ立つれば姫君も。是非なきふりの袖おほひ。フシ一間へ入らせ給ふにぞ。地二人は御後眺めやり。心に思はぬおいさめと。思へば共に打しほれフシさうつ。むきてあたりしが。調いやもうし浮舟さん。去年迄は春日野の山賤。夏は佐保川の螢。秋は洞の紅葉雲井坂の雨迄を。ながめ供させませしに。地此山里のお住ひ。無常がおこらいでなんとせう。おいたはしやと共涙。フシなきはらし袖しほり。調いか様姫君仰せの通り。今日はつれ合ひ八郎殿が非番。地もう戻られさうなものの。遅いに様子はあるまいかな。調サアわしも今朝から胸さわぎ。今に止まぬで猶きづかひ。地わたしもとかく氣がざはつく。若や此家にお忍びを。もれたではあるまいかと。案じに性根奪はれて。フシおもてを見やればかけくる足音。そりやこそそれと思ふ内。其足音もしづまりて。夫々は門前より又案じだす虎口の思案。思ひ付いたか身代りの種をとられてうつとどこまぬく腕に首傾ふけ。と胸にといき青い息。フシむいきをこたへ立歸る。地座につくと二人の女房めいく。夫の

そばに寄り添ひ。いつにかはり御同道にてお歸り。その上物思ひなるお顔もち。氣づかはしや何故と。問へど答へず。詞なんと八郎。手詰になつたが。思案は出たか。イヤなう出ぬ／＼さういふ貴殿は思案があるか。ない／＼。地ないと言つても事すまずと。フシ又も小首を傾くる。地浮舟桐の谷てんでにすりより。詞是まうし。三人よれば文珠とやら。際とも談合の女房。地間はずと話しもある筈。唯さへ案じて胸は板。割つて聞かして下されと。せがみ立つれば二人の夫。ぜひなくも肩をしはめ。詞ヲ、左程に聞きたく思ふならばいうてきかさう。たとへ姫君の事にもせよ。聞いて必ずびつくりすなよ。エ、それ／＼。其驚きでは言はれぬと。地後話さねど二人共。肝にこたへて一時にステはつと計りに。身をひやす。地思案をきはめ八郎。詞コレサ晴時。どう案じても。種取られたより。外の仕様はあるまい。ハテ知れた事。其種にくつたく。サアよい種がこつちにあるが。ソリヤどこに。つい鼻の先に。ホヲ、ムウ鼻のさきなればこつちもある。あらば思案を別々。引別れてして見よう。地女房來れと桐の谷ひつ立て。行かんとするを。詞コリヤまで八郎。別々の思案も面白いが。檢視は意地ある岩根御前。氣がさにはやつて見とがめられては詮なし。若一方が仕損ぜは。一方で仕畢する。とくと二人の女房によそほひをつくらせ。似よつた方をお役にたとう。地必ず忠義を先驅すなと。いひ含むれば尤も。争ひ果ぬは不忠のもと。然らば貴殿は奥の間へ。詞汝はつぎの間。おいきやれ。地いきやれと兩人は。連添ふ女を伴うて。立別れゆく合の手は。姫の爪音始りて。聲無常めく一節や。歌三下りこは情なき。仕業やな。さのみ。人には。つらかりそ。悲しみの。涙眼に。さへぎりて。西も。ひがしもしらなみの。よるべ定めぬうたかたの。いつそ泡とも消えもせて。こがれこがる。身の行方。あをば。／＼と。呼べども。濱の。まつ。風。音ばかり。ナホス地琴の音色もしづまる頃。御臺所の御入りと知らせば是非なく出迎ふ。左京之進晴時。御臺をもてなす場所を定め。フシ平伏してぞ待かける。地檢視は繼母岩根御前。邪慥をかくすうちかけに。針目鋭どき目遣ひも。床几にかゝり柔和を作り。詞自ら此役目なんぼう氣の毒。一旦死したと申し上げたに。つい見

だされて二度の世話。三度の厄介かゝらぬやうに。目通りで首討たせよとの仰せ。生顔と死顔とは相好の違ふものと。ホ、そこそこに氣の付た御上意。用意がよくば姫にあはう。地よび出されよとやはらかな。眞緒と見せても劍と受け。詞御意御尤も。先達てのがれぬ筋を申し含め。御覺悟は致させ置きたり。併し爰に氣の毒は。たゞ姫君は御怒り強く。恨ある者には仇せんとなさるゝ氣相。憚りながら隔た中には遺恨あるもの。地御見分なさるゝとも。遠見になされて然るべしと。おどせばさすが底氣味わるく。遠見がよくば遠見に致さう。地まんざら目先もいたゞしいと。フシかたへに立てば。詞ヲよい御合點。まだ近い。まだ近いと地遙に遠ざけ。誠にやかに一間に向ひ。詞御用意よくば歎きをやめられ。地最期の場所へ御出と。スエ合圖のすゝめに襖を開き。振のうちかけ綿帽子。姫にやつせし浮舟が。波に漂ふ心地にて。フシさしうつむいて座になほる。地不便と思へば晴時涙を含み。詞最前一間で申す通り。親ある者は親の爲。主の爲夫の爲。命とらるゝは人情のならひ。残るは白骨卒堵婆の戒名。地こほりのうすき縁と思へば。いづくに刀はあてられう。ア、是もくり言かなはぬ事。御用意よくばとぬきはなし。詞是々御檢使。只今姫君の御首賜はる。地後て異變はあるまいと。かため詞も遣ひ。捨て太刀ふり上ぐれば詞ア、こりや待て／＼晴時。そりや其方が女房浮舟。地其手はくはぬと見通されはつと仰天。地いや是はこれは地といへど口ごもる詞ハテさて。それさすまい爲目らが檢分。顔は綿帽子で見えねども。似せうと思つて姫が上着。死ぬる者が模様物。氣が付き過ぎて結句で勘付くおれには大事ない。必ず外の者へはしやんなやと。地しめ木でしめる一言に。答もならずう／＼と。スエテ赤面したる折柄に。地一間を明て久米の八郎。詞これ／＼晴時。姫君の御上意あり。我を助けんとして身代りを立てなば。未來迄も勘當。死ぬる者も犬死ならんと仰せ。たつて申せば御生害とある故。ぜひに及ずお供せし。フシ伴ひ出づる。死出立。フシ白無垢に。雪と紛ひの綿帽子。差うつむいて泣きしほれ覺悟の。フシ座にぞ。押なほる。地八郎さつて涙聲。詞何とぞお助け申さんと存じ。様々の計略も皆無駄事。地いそいで御臺様とお暇乞と。刀するりと拔

き放し。目で知らすれば晴時が。勢ひこんで中へかけ入り、調ヤアこゝな不忠者。おのれ現在のお主を見事手にかけるか。おんでもない事主君豊成公が大事。姫君には代へられぬ。いそいでそこ退け。イヤ追くまい。退かぬとおのれぶちはなすが。さういふおのれを。地おのれをといども争ふ有様は。いかな文珠の檢使でも。姫と思はず抜き刀ひらめかしてぞ。フシ見せかけたり。地あて身のふりて晴時を取つて投げ除け八郎が。今ぞ姫君御最期と。ふり上げかゝれば調ヤアおけ。地其手もくはぬと繼母の夜叉聲。とはどうして咎め捨て。又ふり上れば繼母はかけより。取つて引のけ桐の谷が。かづいだる綿帽子ひつたり。調是が姫ならサアうてと。地つき付られてさすがの八郎。討つも討れず殺しもならず。無念の齒をかみどつかと坐し。調口惜しい晴時。仕損じたか八郎。浮舟さん。桐の谷様。へエ、地主てなくはと四人の者。スエテにらみ付けたる目の内に。フシ涙さきだつ計りなり。詮方つきし二人の夫。何思ひけん共につゝ立ち。差し添ぬいて。めいゝ女房の傍へなげ付け。調姫君のお役に立たぬ女ばら。添うて益なしひまくれた。主なしの腰ぬけめらと。地しかりちらして兩人共。座敷を蹴立て入りけるは心。フシありげに見えにける。地思ひよらねば二人は興さめ。とどめる正氣もうつりと。後うち詠めあたりしが。心得がたく浮舟が。ちよつと逢はうと桐の谷を。かたわきへ招きよせ。調お前はなんと思つてぞ。あんまりめんよな隙のくれやう。姫君のお役に立たぬは聞えたが。主なしの腰ぬけと。變つた所へはげみを付た。其上に此脇指。鯉口くつろげ目釘迄しめてあるぞえ。なんと主なしに氣を付け。判じて見ようぢやあるまいか。成程々々其主なしが面白い。主がなければどなたへでも地恨いふのに遠慮もなし。調腰拔の垢ごんせ雪がう。地ヲ尤と身拵へ一腰とつて腰にぶつこみ。岩根御前の右左そり打かけて詞を揃へ。調慳貪邪慳な性根にも。なした業は覚えがあらう。もと此おこりは姫君の。觀世普の尊像を。奪はれ給ふが越度のもと。地世が代の時なら此方から。科人引だす仕やうもあれど。何をいふても王子の天下。横に車の押手はこなた。調詮方なさに姫君の。お果なされたぶんにして。其間に尊像取返し事納めんと思へども。奪返しに

いた更科が。女の手業に及ばぬが。年は越せども今に歸らず。是から日延を百日聞入れ。素直ていにやれば其通り。地いやといやるとおなかへ風穴。主なし女の刃物のあんばい。調腰ぬけ女が切込む手の内。地見せうか。見るかと鏝もとならし。つめかゝれどもびくともせず。詞ヤアべん／＼と日延は叶はぬ。誠姫が助けたくば。其尊像をこゝへだせ。最も今帝と仰ぐ。春日天皇を育て上たる此岩根。後の咎を思はずは。斬りなりとつきなりと。地手ごめにならばして見よと。うちかけ取つて兩方を。威勢で威せばさすがに。時代につれて天子の血の親。夫へたゝりを思はずば。斬りたいなあ。突きたいなあと二人の女は柄の手も。折れる計りに氣をもみ上げ。あせりさわげど詮方も。地なき折めぐむ神戸の方より。おうい／＼とよびかけて。かけくる女は誰なるぞと。見やる桐の谷目角も強く。詞ノウ八郎殿暗時様。林平が女房があれ／＼是へといふ聲に。地すはよい所へ其女房。待つてゐたと二人の夫。かけてる内にいき切つて。詞姫君助くる御佛を。取つて來た持つてきたと。地お厨子をかゝへとび入れば。女夫々々は心もうき立ち。それさへあれば。何思はん。お手柄／＼でかされたと。フシ悦び勇む後より。地ふいと取りもぐ繼母の惡心。詞ヤアそれそこへは渡されずと。地あせればかい込みはつたとねめ付け。詞たとへ尊像持來つても。中將姫は死したる體にて。上をかすめた科のがれず。いそいで首うて。今になつてなんの。佛。地己れ女め同罪と。立蹴にバツタと蹴倒して。フシ床几にかゝる不敵の強惡。地モウゆるされぬと浮舟桐の谷。詞日比の鬱憤今の恨。地思ひ知れと兩方より蹣上つて切りかくるを。持たる厨子にて。てうど受けければまつ二つ。割つたる中に女の首。詞こりやなんぢや。コハいかにと。地あきれる内に浮舟見咎め。悲しや娘千壽が首と。いふに暗時繼母も仰天。更科騒がず聲はり上げ。詞佛法不思議の利生により。それこそ千壽。觀世音の身代と。地いふに四人は思はずも。フシはつと計りにうづくる。地案に相違の岩根御前。身をもみあせり齒嚙をなし。詞扱は己れが手にかけて。身代りを拵へたり。地憎さも憎し一つかみと。をどりかゝるを更科にげのき。詞ア、わつけもない私は。觀音の尊像を玄助方よりばひかへし。豐成公へ

差上げしに。自らへの仰には。一旦中將姫が死したといひしを科におとし。ぜひ繼母が首討てといふは治定。此娘が身の上を語り。自害したこそ幸ひ。晴時八郎に渡し。檢使の岩根に見せなば。邪慳の角の折るゝ事もあらんと。豐成公の御上意。外の事はこちやしらぬと。詞いふより猶も鯨者の如く。詞皆是王子をたばかる仕方。夫豐成を始とし。姫は勿論夫婦のやつら。地今に思ひ知らせんと。いひ罵りて一散に。かけだす所を更科が。ノウ是待つたと抱き留め。思ひがけなく脇腹へぐつと突こむ氷の刃。是はと驚く人々も。厄病神で敵討。そこをゆるめな〜と。いさみ進むをヤレ寄るまい〜。詞何れもは後の咎めて身の上大事。此女房は一本立。殺するわけをいうて聞かさう。地死なずと聞けと取つて引伏せ。詞酷な鬼婆の繼母づらめ。夫林平をだましこみ。よう御佛を盗ましたなあ。詮議にあうてあへない最期。地其時の悲しさ辛さ思ひだす度もう死なう。もう此世をはなれうと。劍を喉へ當たも幾度。詞何とぞ姫君の御難儀を。救うてくれと夫の遺言。それを力に生きながらへ。つれないうき世の一人ずみ。地位牌へ向ふたび毎に。なんの因果で繼母に頼れたどうした報で腹切つたと。水より先に涙をば。手向となして。フシくやみしぞや。地北へ星とぶ夜明迄。夜の目も合はず泣きあかし。こなたに〜逢ふたらと。思ふ一念届いたか。今日といふ今日本望とげる。とどめの刀ちやよう受け取つて下されと。あぐりかゝるをヤレまて女と。晴時八郎かたへに引のけ。詞サア御臺所急處の痛手もはや叶はず。是迄なしたる惡逆。發起して罪をまぬかれ。地未來を助かり給へやと。いたはりおこせばむつくとおき。猛火の吐息に。霰のやうな涙をうかべ。詞おろかや汝等。我惡心も子故のやみ。其大切な子を殺され。今さらなんて發起せうぞ。地恨はなほもいやまざると。聞いて兩人。詞是々それは血迷うてか。こなたの子とはそりやいづくに。いづくはそれなる厨子の内に入れし首こそ我姫。ヒヤウ。地とはどうしてと人々が集り問へば。詞ヲ、我もと淡路の國。武嶋磯大夫が女房。いざかといひし。フシ者なるぞよ。地國を出しはあの子が二つ。みつればかくる子持の張肘。つら憎しとて追出され。都へのぼつて乳母奉公。詞我慢て經上る王子の館。若宮育てた功

により。豊成殿へ押しての嫁入。望は盡きぬ人の習ひ。何とぞ中將姫をなきものにし。地國に残した娘を呼びとり。横萩の家を繼がせんものと。あけくれ戀しう思ふ折から。詞晴時がもらひ歸りて我への目見え。肩の黒子かげの痣。心じるしを見ん爲に側使とて引取り。改め見る程紛ひもなき我娘。地遠く別れてゐる時さへ。家の世つぎと思ふもの。背丈延びたを見るからに。慾にならいてなんとせう。詞世界の人が繼子をば。可愛がるとはいひながら。本の子に代る者三千世界にあらうかいなう。地其可愛い子は先だて。我身は劍に貫かれ。何樂しみに發起して。極樂淨土を祈らうぞ。詞やつぱり無間地獄へでも。娘が行かばついてゆく。地殺さば殺せ。ゑぐらばゑぐれ。コハリ魂魄此世に止つて。中將姫に横萩の。地家はつがせぬくと。我慢の體相虚空をつかみ。コハリ蛇とも。蛇ともならばなれ。つまとはつてといふ息の舌も縮んであへなくも。此世の縁は。フシ絶えにけり。地わつと。泣きだす人もなく。ほつとむねの折からに。奥女中の聲として。詞姫君今日花見にお出で。地お供はよいかとひしめいて。はやかき出す乗物を。見るより浮舟桐の谷が走りよつて後先押へ。詞不慮の事にて繼母岩根様の御臨終。遊山にお出の所てなし。地せめて死骸へお暇乞と。乗物ぐわらりと引あくれば。立ち出て給ふ中將姫。墨の衣に花の帽子。御手に數珠は百八の。魂とんで人々は思はずわつと泣出す。姫君御聲かきくもり。詞歎いてたもんなかつた。寸善尺魔は互にあり。我なくんば母様の。惡事もあるまじ我も亦。地母様なくんばいつか火宅の門を遁れん。詞其御死骸が善智識。たゞ悲しきは父上の。お歎き思ふが迷ひぞよ。晴時八郎。地よきやうに申し傳へてくれよとて。御涙せきあへさせ給はねば。誰か一人顔上て。こたへる人もないじやくり。フシとどめかねたる計りなり。地中にも更科涙を押へ。詞われこそ眼前繼母の仇。地冥土の道づれ致さんと。死骸の双物ぬきとる手先。晴時押へてやがてもぎ取り。詞惡人殺すは天下の爲。すぐに尼公の御弟子となれと。地誓ふつと押切れば。八郎すゝめて二人の女房。共にお供と差出す。フシ姫君歡喜の。肩を開き。詞ヲよきかなよきかな。敵も味方も一蓮託生。地夢の浮世は有爲轉變。雷光石火の影のうちは生

死不定のはるゝひまなし。煩惱業苦の此世に住まば。貪欲瞋恚の修羅にかゝはり。ほしいをしいの苦患を受けん。己心の彌陀。唯心のフシ淨土ときけば。しやかはやり。彌陀は導く一筋に。こゝを去る事遠からず。げにや今。此。三界衆生は皆これ。教主釋尊御子なり。提婆が悪も薩埵の慈悲。繼母はまさしく外面似菩薩。内心夜叉も佛の濟度。ぜさん無差別疑ひなし。何れも門出は稱名念佛。見送る人も南無阿彌陀佛。三下りなまいだ。なまいだ。なまいだ。なまいだ。つ。なまいだ。あみた ナホス南無阿彌陀佛彌陀佛と。稱へ稱へて四人連當麻。寺へと別れ行く。

第 五

歌功徳池の蓮の白絲洒しつ染めてはたをりやエイソレ御法の囁のいとさばき。おさ打手許も殊勝なる。口に稱名。當麻寺の。庭に佛のそなへ機。フシ一心不亂の折も折。地日影を山に失へばぞと身にしむ夕あらし。一本の松のそよぎに恐れ。はつと計りに中將法女。スエテたえ入り。給へばやれ悲しや。時も違へず又かいなうと。浮舟も桐の谷も。フシあはて立よりだきかゝへ。詞コレく更科殿。姫君の御病氣。典藥の力に及ばぬ故。長谷寺の徳道上人様に。お加持してもらふ筈。地大かた樋の口迄お出である。早うお迎ひにいて下されと。いふに機糸打やつて。エ、おとましの繼母づらめ。調殺した私へは仇せずに。弱味へつけこむ卑怯妄念。地祈とばすぞ待てあよと。フシ驗者迎ひに走りゆく。コハリげにも繼母の執念。松が枝つたふ小蛇。鎌首もつ立て紅の舌を。ふりたてナホス尼公に。くらひつかんと呪を。狙ひよこそ。フシ恐ろしき。地よせじと桐の谷機竹押取り。たゞきかゝればコハリ後へひく。のけば頭を又ぞつと。のばすを見返りエ、憎くや。あたしつこいとふり上げ。く。フシたゞけば。地尼公ナウ是々。桐母様の妄執ならば。構へて打擲する事なかれ。地南無。春月院妙雪信女ゆるさせ給へと合掌の。コハリ胸元めがけ

蛇がまとひ。さがるを浮舟追たて。詞是繼母の妄念故。邪慳なこなたを浮ませうと。此曼陀羅を手向の機織。それ故死骸を葬りし。元興寺の玄防殿に。戒名書かせて是を肌にと。地中將法女の御首に。かけ給ひたる守を取出し。詞此お心な姫君とは死ても見えぬか。地いかなればそれ程迄に憎いぞや。此戒名に書いたる通り。妙雪様なら妙なる雪と。消えて給はれ御豪様。生をかへても姫君を恐ろしがらすが面白い。エ、どうよくなくと身ふし。フシなやして打つける。コハリ守りを蛇は引つくはへひけば。地是はと驚く浮舟。桐の谷も立かゝり。それとられては御願の妨放さぬかと。追うても引いても放さばこそ。尼公は機の上。恐れわなき給ふにぞ。地二人の女も恐れながら。やらじと守の紐に取付き引けば。引く程執念深き。蛇は頭に總身の力。入れて引くよと見えけるが。なんなく紐をくひ切つてフシ守を。くはへ葉がくれす。地二人もまろびあき果て見上る計り尼公は。我罪業と身をくやみ。スエテふししづみ。てぞ。おはします。フシ共にかこてば胸せまり。フシ心もくらむ黄昏時。いざ佛間へと。御手を取りいたはりおくにへ入相の。比より夜毎に中將法女。惱ませ給ふと大臣より。便を受けて長谷の徳道。忍辱柔和の袈裟衣。不淨を隔つる。二上や。地當麻の寺内尼公のフシ庵の。佛間に入給ひ。地暫く加持しうや／＼しく。數珠音共にたかだかと。祈の聲は猶腹立と。思ふに化したる異形の姿。顯れたり。器具月は空にて。魔の姿を。にらめば。恐れて。蓮葉を。傘にかざして此處彼處と。一間をめがけて。しのびあし。謠寄らんとすれども讀誦の聲と。猶てりかゝる。月のかげに。目もくれなみにそみわたるは。蓮の糸の。染殿が。地加持の奇特に御惱みおこたり給へば徳道上人。猶も外重を清めんと一間を出でていらたか數珠。さらり／＼と押もんで又。一祈り祈つたれ。謠囊謨三曼多嚩曰羅。いかに験者はや歸り給へ。歸らて不覺し給ふな。江戸たとへいかなる惡靈なりとも。我法力の盡くべきかと。重ねて數珠を。押もんで。謠東方に降三世明王。南方軍荼利夜叉。西方。大威德明王。北方金剛夜叉明王。中央大聖。不動明王。囊謨三曼多嚩曰羅。旋多摩訶囉遮那。娑婆多耶吽多囉吒干鎧。聽我說者得大智惠。知我身者即身成佛と。地祈

り祈られまろふと見えしが。又立上つてとびかゝり取て引つく。しかれて猶も。コハリ祈れば憎しと答をふり上げ。フシ打たんとかゝる後より。地豊成かけ出て鬼形の腕先。取てねぢ上げ験者を助け。詞げにも貴僧の教へに違はず。遙わきより鐘にうつせば。あり／＼うつる紛れ者と。地咎をもぎ取り鬘と面。たゞきおとせば荒法師元興寺の玄昉なり。拟こそしれもの誰かある。白狀させよの仰を待かね。晴時八郎飛んで出て左右につめかけ。詞サア玄昉。何故繼母の死靈にやつし佛道に叶ひし姫君を。威し惱ます仔細はなんと。地痛い目せぬ内白狀めされと。迷れ難なくせめかけられ。ハツト我慢の力も弱り。顔色變じてどつかと坐し。ア、誤つたり懺悔申さん。詞そも此姿の因縁といつは。かねて愚僧が行力の。威をふるはんと佛者をけづる。慢心募つて淡州の海より上りし觀音の尊像。たばかり取つて土中に隠し。其科則ち佛法に。地歸依する姫の越度といはせ。憎む繼母の腰をおし。追すくめて我行力。秀てんものと思ふにかひなく。繼母は絶命觀音は奪ひ返され。手段つきたる無念の折から。當寺において中將姫。母聖靈へ手向として。詞極樂の變想織ると聞くより又是に。何がな邪魔をと思ひし夕ぐれ。蛙をふくみし蛇を見付け。是幸ひと蛙をもぎとり。其血をしぼりすみにすりませ。繼母の院號戒名。くろ／＼とかき認め。地姫にもたせて件の蛇を。此松が枝にはなしおき。誠に繼母の執着と思はて。詞機織の間妨げしを。いのり加持する長谷の徳道。打殺さんと死靈の立ち。詞かく顯れては邪法も叶はず。命を助け給はらば佛法にひるがへり。此後惡事に與せぬ證據。罪ほろぼしに一大事。あかし申さん其仔細は。詞天皇大炊の君諸共。此寺にまします事惡王子の耳へ入。今宵愚僧が手引して。芦屋の時澄。廣嗣に討とらす約諾。則ち合圖は此笛と。地出せば豐成手に取給ひ。詞誠に天子の御大事。けなげの白狀奇特の發起。地仇を恩にて命を助くる。猶も佛へ懺悔あれと。引立てられて姿もやはらぎ。忍辱慈悲の。徳道諸共。オクリ佛間にへ入ぞありがたき。地主從見送りこかげに立より。合圖の笛を吹き立給へば。時澄廣嗣ひそめきて。時分よしやと忍び足。やり通して晴時八郎。とびかゝつて蹴倒せば。コハたばかれし口惜し無念と。もがく二人を骨

ひしぎ。高手小手にいましめて。引立んとする所へ。なる雷のひびくが如く。長屋の王子縁さきに踊り出て。詞ヤア丸が舊臣に繩かけたは。豐成が二心に極つたり。兼て一味の軍勢共。下合へやつと呼ぶる聲。地承ると近郷近在。官軍加勢の大將分。フシ我先にとぞこみ入つたり。地爰ぞと豐成錦の御旗。まつ先につき立て。詞和殿達は禁庭守護の武士ならずや。地錦の旗へ敵對かと。日月風になびかし給へば。それよく其御旗のある方へと。打てかはつて王子へ敵對。フシ我討とらんと。ひしめいたり。地ちつともひるまらず長屋の王子。詞ヤア手の裏かへす腰ぬけめら。地憎さも憎しと小をどりし。さきに進みし木辻の九郎。ひつつかんで人礫。やらじとかゝる軍勢を。ねち首つゝぬき蹴殺し蹴倒し皆殺し。すきをねらうて晴時八郎兩人が。とつたとかゝるをびくともせず。左右の小わきにかいこんで。地優しき腕だて命のきはと。地金剛力士の王子と兩人大地をふみぬく勢ひも。フシ危く見ゆれば。地豐成公走りよつて後より。髪束取て引よせ給ふを。詞汝を待つたとふりかへれば。地いづくよりとも白羽の矢。一筋來つて王子の眉間急所にひるむを晴時八郎。はねかへして取て引ふせ。首をかゝんとする所を。詞暫く待てと御聲高く。地弓よこたへて大炊の君。詞天子を弑せんとする強敵といへども。死罪を許し遠流せよと。地いともかしこき勅。慈悲萬行の法の庭。惡人當麻に蓮の曼陀羅。長谷には德道。平城には玄昉。元興寺のめんも三國にためし。稀なる御寶と和ぐ。國に納りて末の代。永く尊めり

